

CLUSTERPRO

MC StorageSaver 2.1 for Windows

ユーザーズガイド

© 2016 (Mar) NEC Corporation

- はじめに
- 製品の概要
- 製品の機能
- 設定ファイルの設定
- 操作・運用手順
- CLUSTERPRO との連携
- イベントログメッセージ
- 注意・制限事項について
- リファレンス
- 付録

改版履歴

版数	改版	内容
1.0	2015.3	新規作成
2.0	2016.3	Srgconfig.exe コマンドのオプション追加、イベントログファイル名誤記の修正、対応ストレージ機器の追加、Oracle ASM 対応機能追加

はしがき

本書は、CLUSTERPRO MC StorageSaver 2.1 for Windows（以後 StorageSaver と記載します）のディスク装置監視に関する設定について記載したものです。

(1) 商標および登録商標

- ✓ Microsoft、Windows、Windows Server は、米国 Microsoft Corporation の米国およびその他の国における登録商標または商標です。
- ✓ Windows Server 2008 の正式名称は、Microsoft Windows Server 2008 です。
- ✓ Windows Server 2008 R2 の正式名称は、Microsoft Windows Server 2008 R2 です。
- ✓ Windows Server 2012 の正式名称は、Microsoft Windows Server 2012 です。
- ✓ EMC、Symmetrix、CLARiX、VMAX、VNX、XtremIO、PowerPath は EMC Corporation の商標または登録商標です。
- ✓ CLUSTERPRO X は日本電気株式会社の登録商標です。
- ✓ Oracle は、Oracle やその関連会社の米国およびその他の国における、商標または登録商標です。
- ✓ この製品には Apache Software Foundation (<http://www.apache.org/>) が開発したソフトウェア(log4net)が含まれています。
著作権、所有権の詳細につきましては以下の LICENSE ファイルを参照してください。
【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥LICENSE.txt
- ✓ その他、本書に登場する会社名および商品名は各社の商標または登録商標です。
- ✓ なお、本書では®、TM マークを明記しておりません。

(2) 参考ドキュメント

- ・ 「CLUSTERPRO MC StorageSaver 2.1 for Windows インストールガイド」
- ・ 「CLUSTERPRO MC StorageSaver 2.1 for Windows リリースメモ」
- ・ 「CLUSTERPRO MC StorageSaver 2.1 for Windows イベントログメッセージ一覧」

(3) インストールフォルダのデフォルトパスは、“C:¥Program Files” とします。

(4) 【windir】はシステム環境変数で、通常は “C:¥WINDOWS” です。

目次

1. はじめに	1
1.1. 表記規則	1
2. 製品の概要	2
2.1. 製品概要	2
2.2. 製品の構成について	6
2.3. 製品導入に関する注意	7
3. 製品の機能	8
3.1. ディスク装置のリソース監視手順	8
3.2. I/O パスの監視手順について	11
3.3. リソース監視で異常検出時の動作	16
3.4. アクションの定義について	17
3.5. オンライン保守機能	21
3.6. クラスタウェアとの連携機能について	22
3.7. Oracle ASM 環境における StorageSaver による監視について	22
4. 設定ファイルの設定	25
4.1. 本製品の導入	25
4.2. 設定ファイルの自動生成手順	26
4.3. Oracle ASM 環境における設定ファイルの自動生成	28
4.4. 設定ファイルの記述	30
5. 操作・運用手順	41
5.1. 運用管理コマンドの操作手順	41
5.2. Oracle ASM 環境における運用管理コマンドの操作手順	49
5.3. オンライン保守コマンドの操作手順	51
5.4. 障害復旧時の操作	56
5.5. Oracle ASM 環境における障害発生時の復旧手順について	58
5.6. H/W 構成変更時の設定手順	60
5.7. Oracle ASM 構成変更時の設定手順	61
6. CLUSTERPRO との連携	62
6.1. CLUSTERPRO との連携の概要	62
6.2. モニタリソースによる CLUSTERPRO との連携	63
7. イベントログメッセージ	65
7.1. イベントログに出力するメッセージについて	65

7.2.	警報対象として登録することを推奨するメッセージ一覧	65
7.3.	運用管理製品との連携.....	66
8.	注意・制限事項について.....	67
8.1.	注意・制限事項.....	67
8.2.	オンライン保守における注意事項	70
8.3.	Oracle ASM 環境における注意制限事項	71
9.	リファレンス.....	72
10.	付録	86
10.1.	運用管理コマンド	86
10.2.	Srgquery.exe による設定ファイル自動生成手順	88
10.3.	本製品のテスト手順について	89
10.4.	Oracle ASM 環境における擬似障害のテスト手順について	96
10.5.	CLUSTERPRO との連携手順.....	103
10.5.1.	CLUSTERPRO 連携設定.....	103
10.5.2.	動作確認	113

1. はじめに

本書は、インストール後の設定全般を行うシステム管理者とその後の運用・保守を行うシステム管理者を対象読者とし、インストール後の設定から運用に関する操作手順を説明します。

1.1. 表記規則

本書での表記規則について、下記のように定義します。

記号表記	使用方法	例
『』	画面名の前後	『CLUSTERPRO Builder』にて実施します。
「」	参照するマニュアル名の前後 参照する章および章のタイトル名の前後	「CLUSTERPRO MC StorageSaver 2.1 for Windows インストールガイド」を参照してください。 「9. リファレンス」を参照してください。
【】	ファイル名およびフォルダ名の前後	【インストールフォルダ】 ¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.config
[]	項目名の前後	[HA StorageSaver] を選択してください。
斜体、太字	パラメータ名 ボタン名 チェックボックス名	DiskFaultAction 完了 を押してください。 常駐 を選択してください。

2. 製品の概要

2.1. 製品概要

(1) 製品の提供する主な機能

本製品は、Windows のディスク装置の I/O パスの状態を定期監視します。I/O パスの異常を検出すると障害を通知し、さらにディスク装置へのアクセスができなくなった場合、クラスタウェアと連携しノードを切り替えることでクラスタシステムでの可用性を向上させます。

・共有ディスクのリソース監視機能

FC 接続や SCSI で接続されたディスク装置に対して、TestI/O によるリソース監視を実現します。

- ディスクアレイ装置コントローラの障害監視
- FC カード、SCSI カードの障害監視
- I/O パスの死活監視
- I/O リクエストのストール監視

・I/O パスの自動閉塞機能

StoragePathSavior(以降、SPS)または EMC 社製 PowerPath で冗長化された I/O パスを有するディスク装置において、リソース監視で異常を検出すると障害の発生した I/O パスを閉塞し、すみやかに正常なパスへ切り替えます。

- 間欠的な FC リンクダウン障害に伴う頻繁なパス切り替えによる I/O パフォーマンスの低下やほかのディスク装置への影響を未然に防止します。

注意 PowerPath による I/O パスの閉塞では、ほかのパスが I/O 高負荷状態もしくは異常状態である場合を除いて、対象パスを I/O の対象としないようにします。そのため、対象パスへの I/O が完全に遮断されるわけではありません。

・クラスタウェア連携機能

ディスク装置へのすべてのインタフェース機構の異常により、ユーザーデータへのアクセスができなくなると、クラスタウェアと連携し、パッケージの移動やノード切り替えにより業務の継続的な運用を実現します。

注意 本機能は、クラスタウェアが導入されたクラスタシステムで使用可能です。

- ・オンライン保守機能

FC 接続のディスク装置に対して、SPS や EMC PowerPath における I/O パスの一括閉塞、一括復旧を実現します。

これにより、FC 上でリンクダウン時の障害が発生した際に、障害装置の特定化と保守員によるシステム無停止保守を可能とします。

- ・運用管理機能

I/O パスの監視状態の表示やマニュアル操作による閉塞、復旧といった運用管理機能をコマンドインタフェースで提供します。

注意 閉塞機能・復旧機能は SPS 構成、EMC PowerPath 構成の I/O パスに対してのみ有効です。

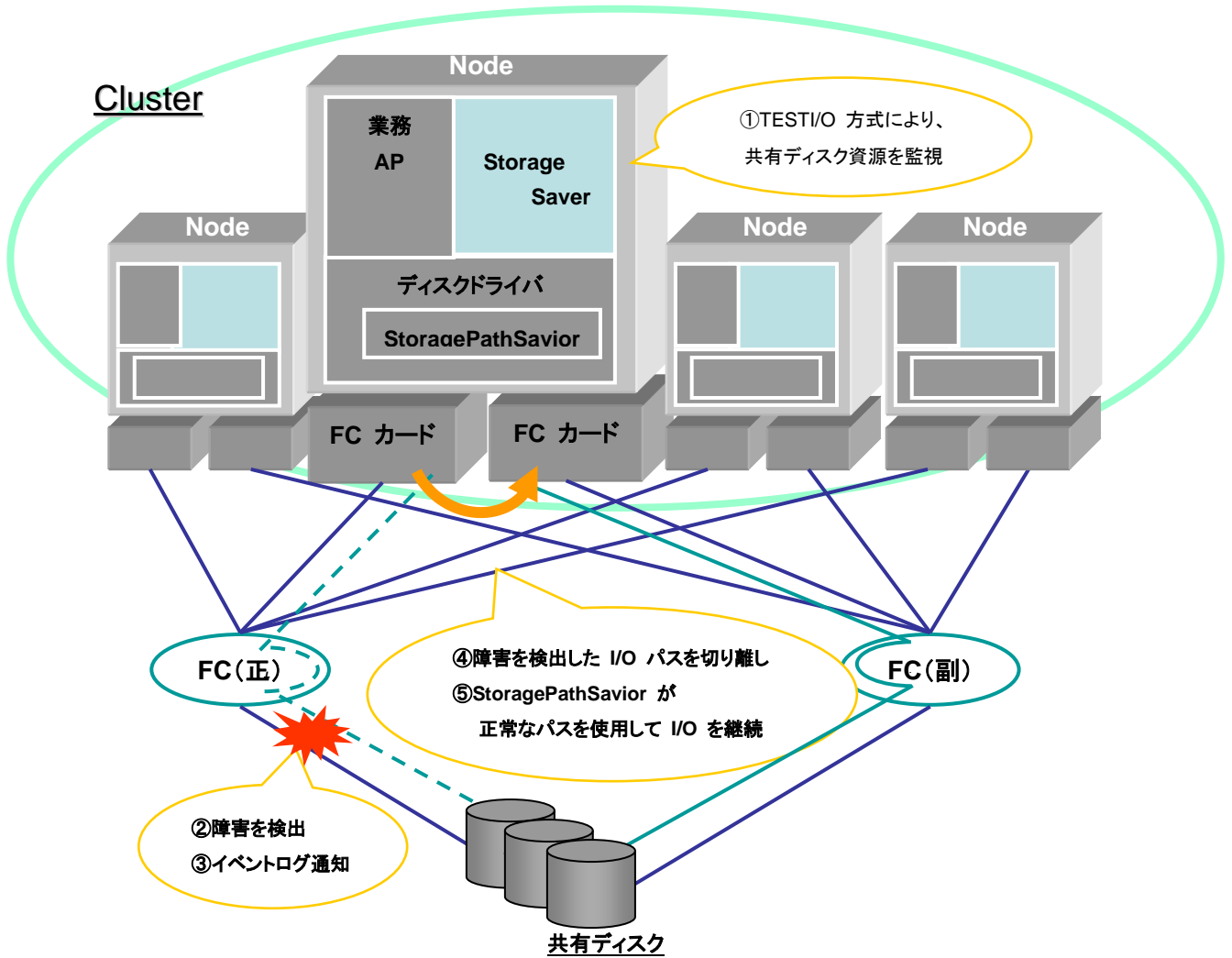
- ・オートコンフィグレーション機能

設定ファイルの自動生成機能を提供します。

- ・プロセス監視機能

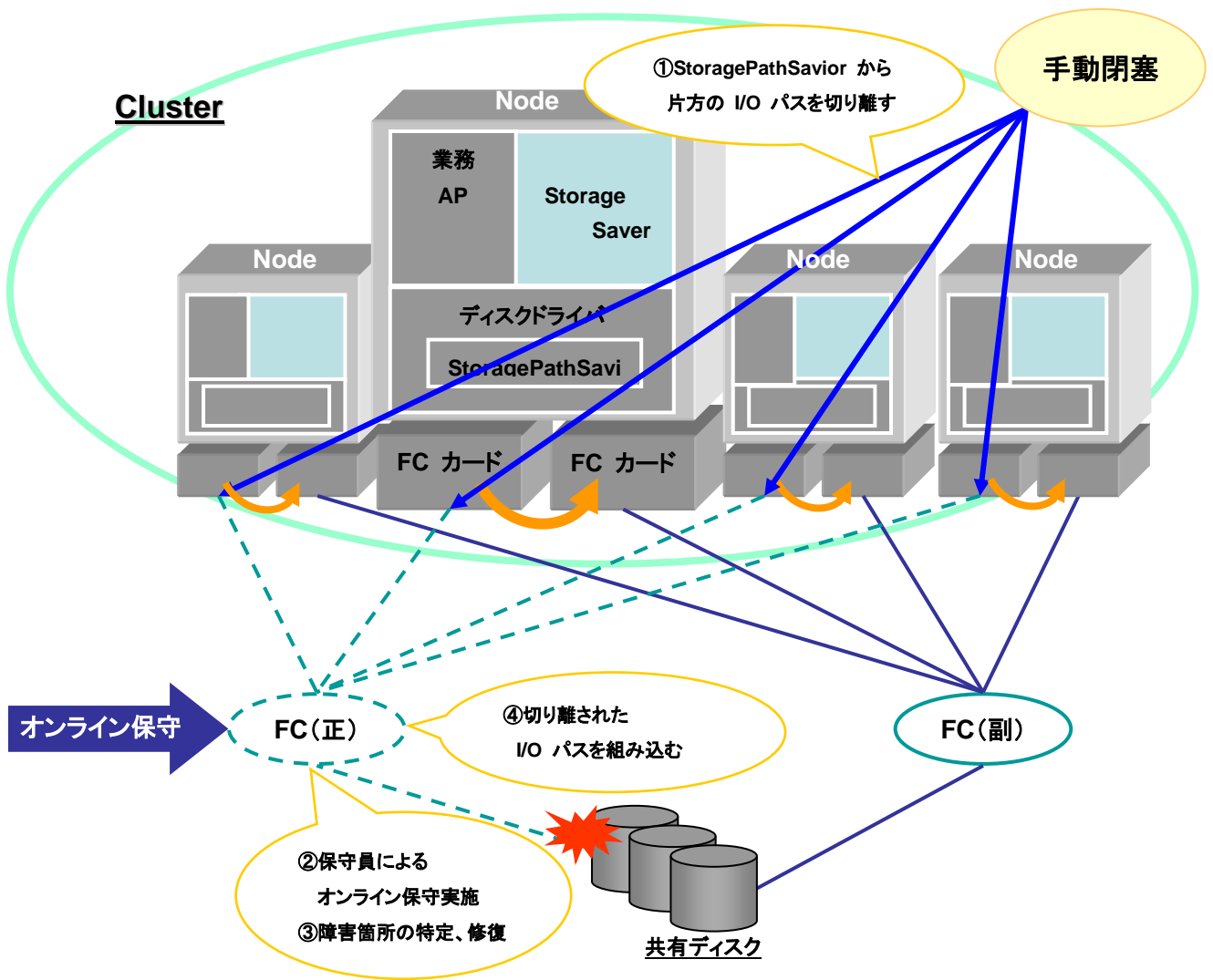
本製品で提供するデーモンプロセスやリソース監視コマンドの動作状態を監視し、異常を検出すると自動的に再起動します。これにより、継続的な監視を実現します。

(2) 自動閉塞の流れ



※上記は iStorage を監視する場合の図です。

(3) オンライン保守の流れ



※上記は iStorage を監視する場合の図です。

2.2. 製品の構成について

- (1) StorageSaver は、下記のコンポーネントにより構成されます。

ディスク装置のリソース監視、I/O パスの運用管理を行う機能です。

下記のデーモンプロセスおよびコマンドにより構成されます。

・ Srgd.exe	リソース監視デーモン
・ Srgping.exe	リソース監視モニタ
・ Srgadmin.exe	運用管理コマンド
・ Srgquery.exe	設定ファイル生成コマンド
・ Srgconfig.exe	設定ファイル確認コマンド
・ Srgstat.exe	クラスタウェア連携用コマンド
・ Srgwatch.exe	プロセス監視デーモン
・ Srgextend.exe	手動復旧コマンド
・ Srgreduce.exe	手動閉塞コマンド
・ Srgrecover.exe	構成復旧コマンド
・ Srgdisplay.exe	状態表示コマンド

下記のフォルダを使用します。

・実行形式ディレクトリ	【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin
・設定ファイル管理ディレクトリ	【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf
・ログ管理ディレクトリ	【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥log

2.3. 製品導入に関する注意

本製品は、HW 構成、SW 構成、運用環境によってはご利用いただける機能が制約される場合があります。

導入にあたっては、十分な検証を実施してください。

- (1) HW 構成的なサポート範囲は下記のとおりです。

インタフェース

- FC スイッチ接続
- FC 直結接続
- SCSI SE/FWD 接続

ディスク装置

- x86 および x86_64 対応 CPU 搭載サーバ接続のディスクアレイ装置
- セクタサイズが 512 バイトまたは 4096 バイトのディスク装置
- 増設ディスク装置

(注) NEC が正式販売しているディスク装置が対象となります。

2016 年 3 月時点でサポート済みのディスクアレイ装置は以下のとおりです。

- ・NEC 社製 iStorage S、D、M シリーズ
- ・EMC 社製 CLARiX シリーズ
- ・EMC 社製 Symmetrix シリーズ
- ・EMC 社製 VMAX シリーズ
- ・EMC 社製 VNX シリーズ
- ・EMC 社製 XtremIO

個別対応のディスク装置や上記以外のディスク装置を接続、監視する場合は、開発部門までお問い合わせください。

- (2) SW 構成的なサポート範囲は下記のとおりです。

I/O パス管理製品

- StoragePathSavior
- EMC 社製 PowerPath

3. 製品の機能

3.1. ディスク装置のリソース監視手順

ストレージシステムを構成する I/O パスに対して定期的に TestI/O を発行することで、I/O パスの障害を早期に検出します。TestI/O で異常を検出した I/O パスについては障害状況をレポートし、障害の波及を防止するために I/O パスの自動閉塞やノード切り替えなどの設定された対処を実行します。

TestI/O の監視対象となる検査項目は下記のとおりです。

- I/O パスの死活監視
- I/O リクエストのストール監視

TestI/O は SCSI パススルードライバ経由で下記の SCSI コマンドを発行することで行われます。

- Inquiry command
- TestUnitReady command
- Read10 command

(1) 対象となるディスク装置

- 増設 SCSI ディスク装置
- SCSI 接続ディスクアレイ装置
- FC 接続ディスクアレイ装置

(2) ディスク装置のリソース監視手順

1. ディスク装置コントローラに対して TestI/O (Inquiry command)を発行します。
2. LUN を構成する I/O パスに対して TestI/O (TestUnitReady command)を発行します。
3. LUN を構成する I/O パスに対して TestI/O (Read10 command)を発行します。

(3) TestI/O による監視項目について

- I/O パスの死活監視
 - I/O リクエストのストール監視
- (注)ディスク装置のメディアエラーは検出できません。

(4) TestI/O の対象となる I/O パスについて

設定ファイルに登録された I/O パスが TestI/O の対象となります。

下記のように監視対象から切り離されている I/O パスは TestI/O の対象とはなりません。

- 閉塞状態、障害状態の I/O パス
- オンライン保守実施中の I/O パス

- (5) コントローラに対する TestI/O 実行手順について
FC リンクダウンやコントローラ障害を検出するために、
ディスク装置配下のコントローラに対して TestI/O を発行します。
コントローラが正常応答すれば、デフォルト 20 秒間隔で TestI/O を繰り返します。
コントローラが正常応答しない場合は、デフォルト 180 秒の間 TestI/O を継続実行し、
このリトライ時間内に復旧しなければ、コントローラおよび配下の I/O パスを
障害状態として扱い TestI/O を終了します。
- (6) I/O パスに対する TestI/O 実行手順について
LUN の障害を検出するために I/O パス単位で TestI/O を実行します。
I/O パスが正常応答すれば、デフォルト 180 秒間隔で TestI/O を繰り返します。
LUN が正常応答しない場合は、デフォルト 180 秒の間 TestI/O を継続実行し
このリトライ時間内に復旧しなければ、I/O パスを障害状態として扱い TestI/O を終了します。
- (7) I/O パスの死活管理について
TestI/O の実行結果として、以下の状態をレポートします。
- up
TestI/O が正常終了し I/O パスが正常に動作している状態です。
 - down
TestI/O が異常終了し I/O パスが利用不可な状態です。

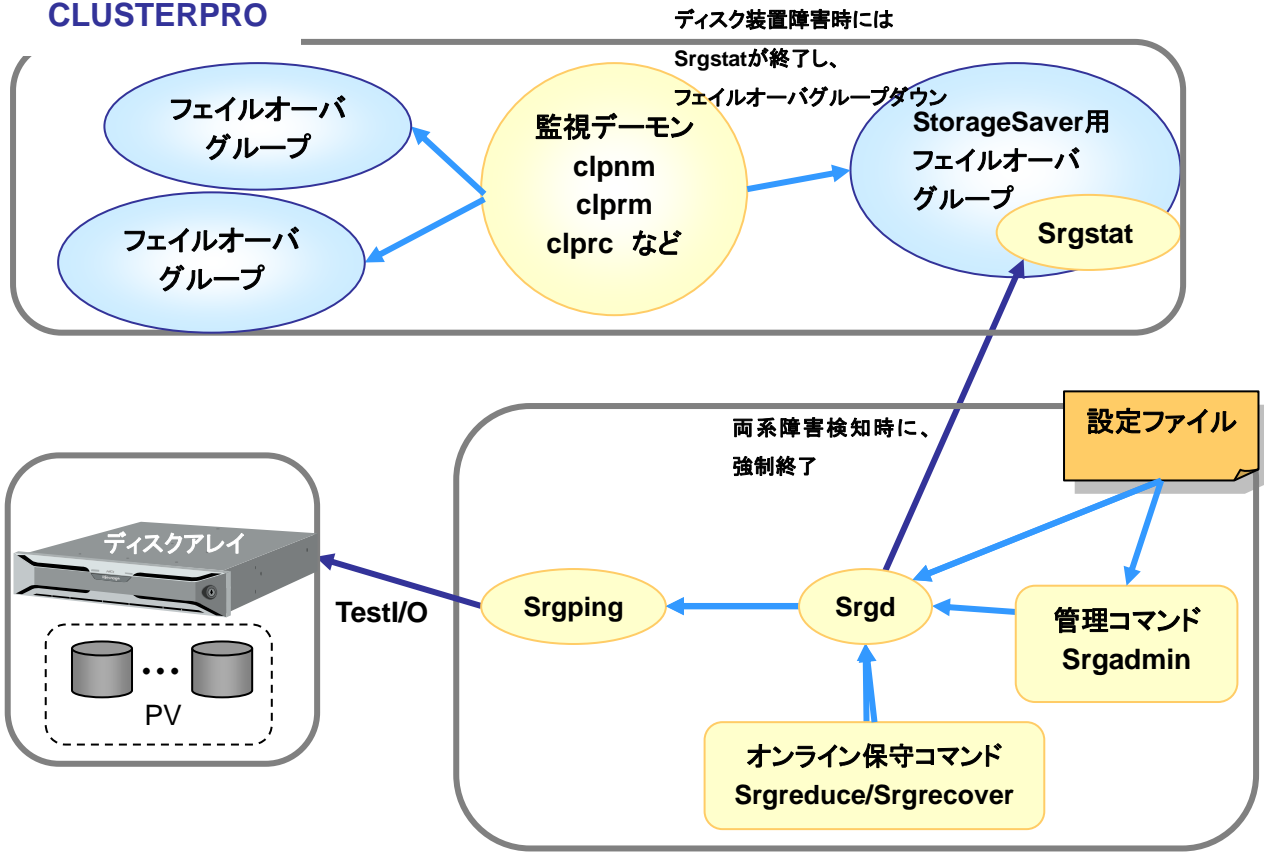
DriveLetter レベルのステータスとして以下の状態をレポートします。

- up
DriveLetter が正常に動作している状態です。
- suspend
DriveLetter を構成する片系の I/O パスに異常を検出した状態です。
- down
DriveLetter に異常があり、利用不可な状態です。

I/O パスの組み込み状態を示す Online status として、以下の状態をレポートします。

- extended
I/O パスが組み込まれた状態です。
- reduced
I/O パスが閉塞された状態です。
- alive
TestI/O による I/O パスの状態は確認できていますが、StorageSaver 内部の
監視状態の同期が一部取れていない状態です。
- unknown
I/O パスの状態が確認できない状態です。

CLUSTERPRO

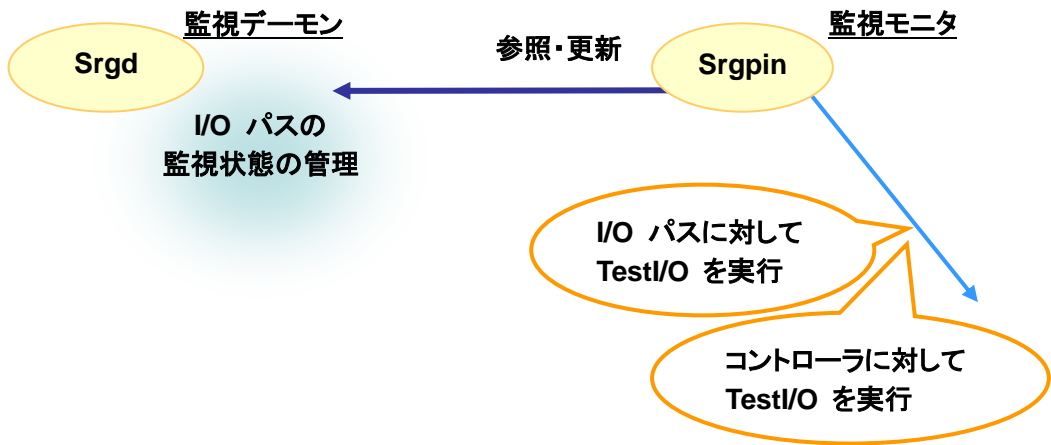


StorageSaver の構成

3.2. I/O パスの監視手順について

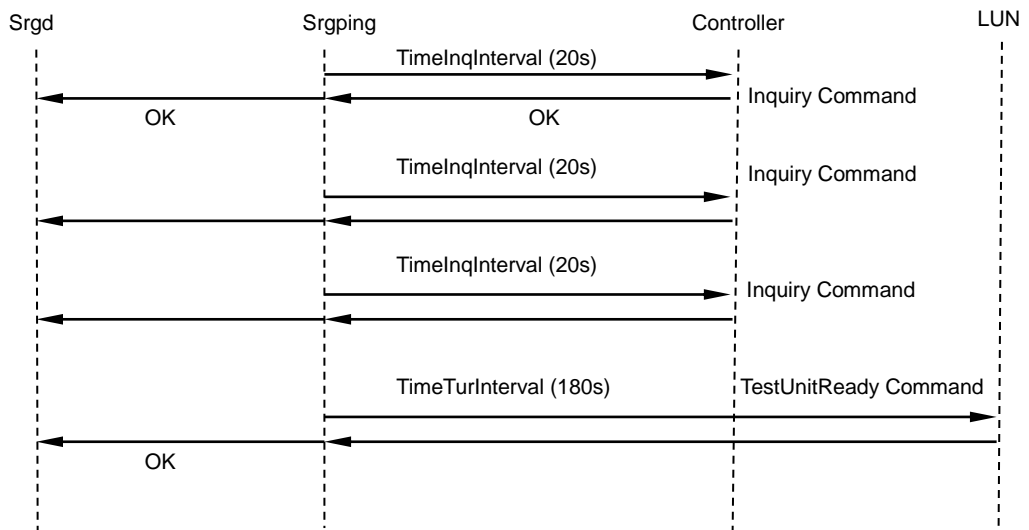
- (1) I/O パスの死活監視
 ディスク装置コントローラおよび LUN を構成する I/O パスに対して定期的に SCSI パススルーコマンドを利用して TestI/O を発行します。TestI/O が正常終了しない、または、タイムアウトした場合は I/O パスを異常と判定します。

【TestI/O のフレームワーク】



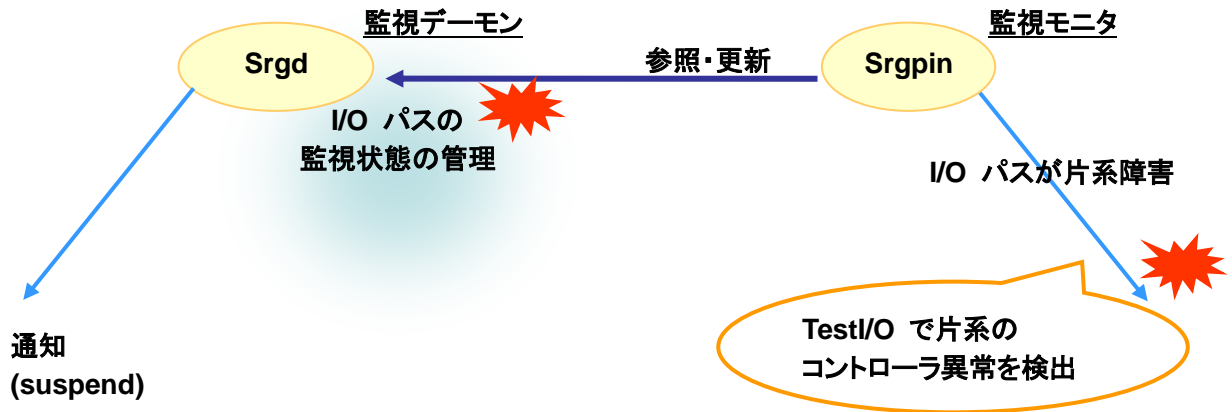
- TestI/O の正常なシーケンスは以下のような動作になります。

DriveLetter 障害検出時間	: TimeDiskFault	: 60(秒)
I/O パスの障害検出時間	: TimeLinkdown	: 180(秒)
コントローラ監視間隔	: TimeInqInterval	: 20(秒)
LUN 監視間隔	: TimeTurInterval	: 180(秒)



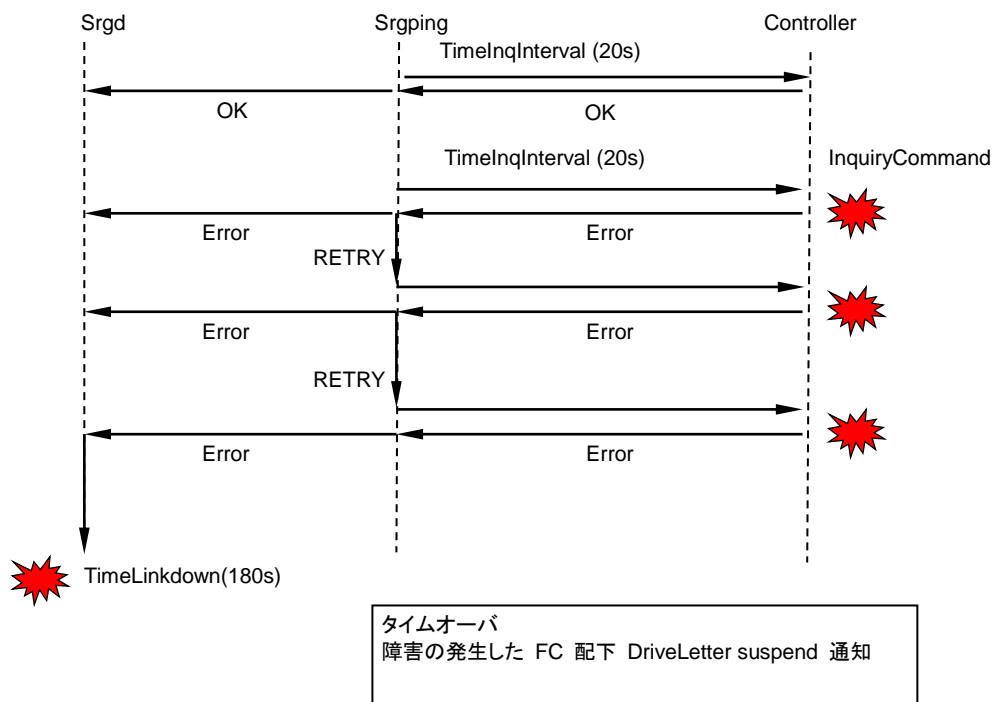
- (2) I/O パスの死活監視で片系障害を検出
冗長化された I/O パスを構成するディスク装置コントローラ、FC スイッチ、FC カードのいずれかの部品の片系が故障した場合、障害をレポートします。

【TestI/O で片系コントローラ異常を検出】

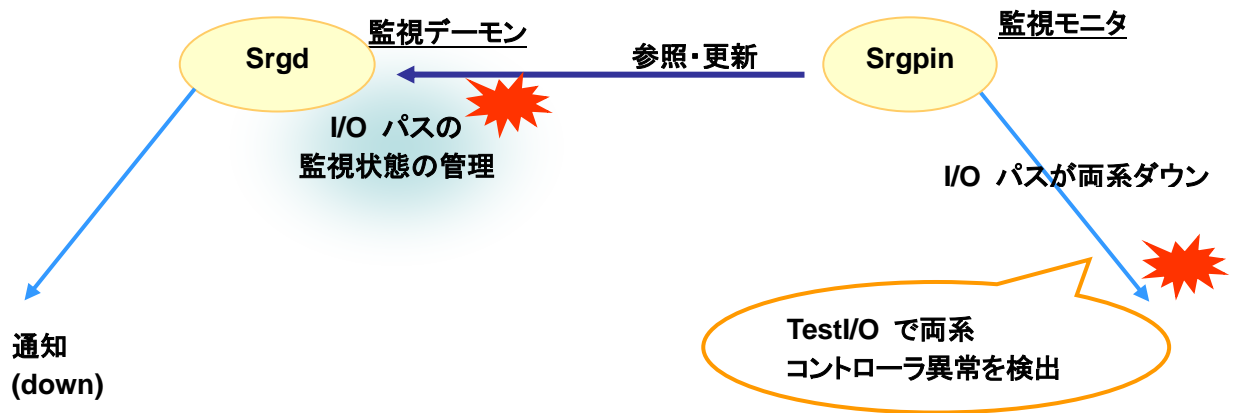


- TestI/O で片系コントローラの異常を検出すると以下のような動作になります。

DriveLetter 障害検出時間	: TimeDiskFault	: 60(秒)
I/O パスの障害検出時間	: TimeLinkdown	: 180(秒)
コントローラ監視間隔	: TimeInqInterval	: 20(秒)

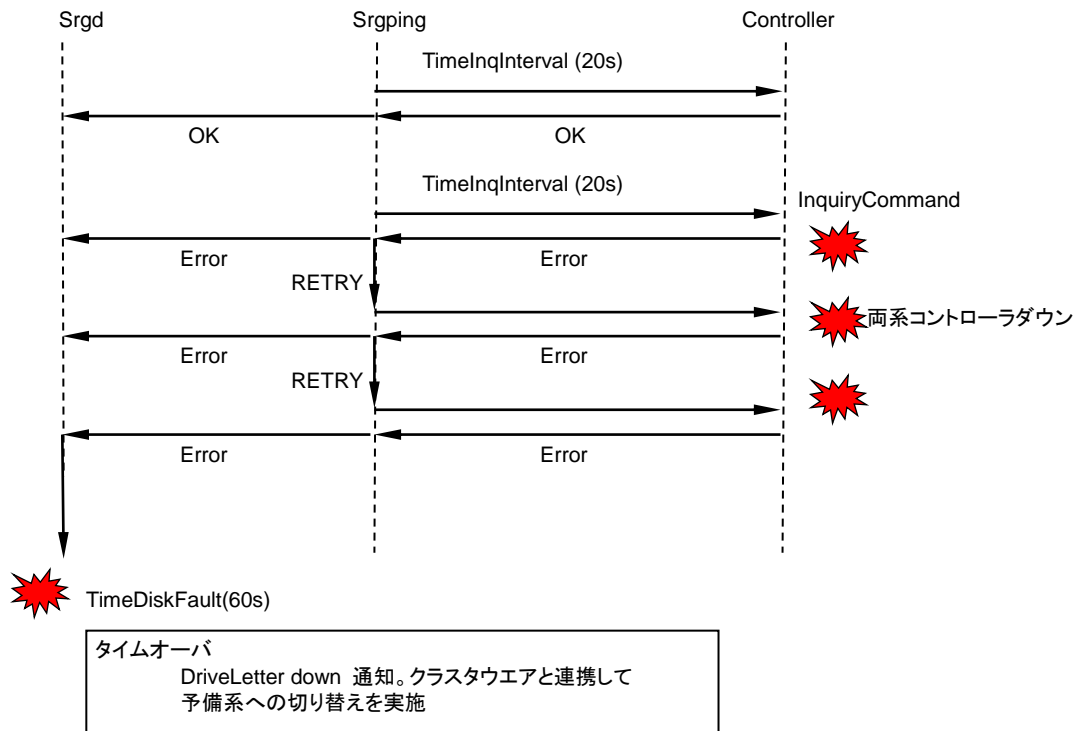


- (3) I/O パスの死活監視で両系障害を検出
冗長化された I/O パスを構成するディスク装置コントローラ、FC スイッチ、FC カードのいずれかの部品の両系が故障した場合、予備ノードへ切り替えます。



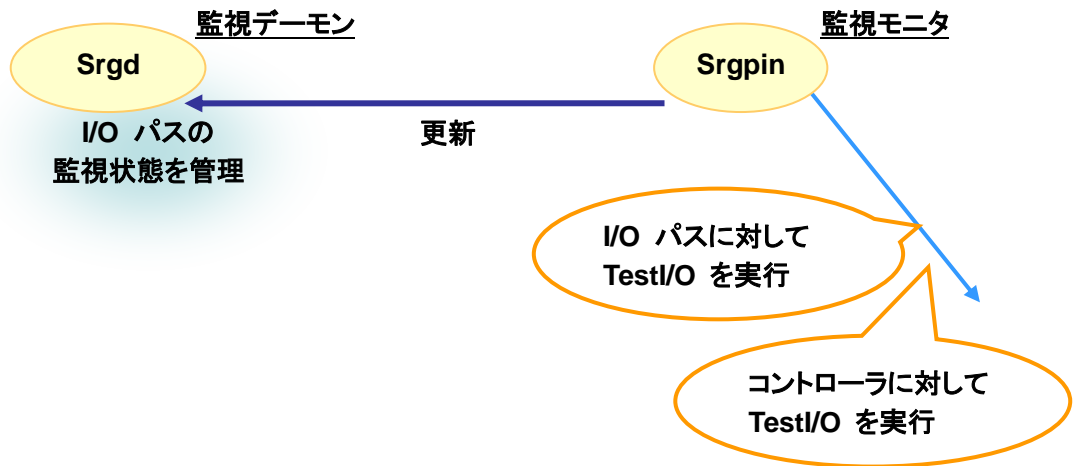
- TestI/O で両系コントローラの異常を検出すると以下のような動作になります。

DriveLetter 障害検出時間	: TimeDiskFault	: 60(秒)
I/O パスの障害検出時間	: TimeLinkdown	: 180(秒)
コントローラ監視間隔	: TimeInqInterval	: 20(秒)



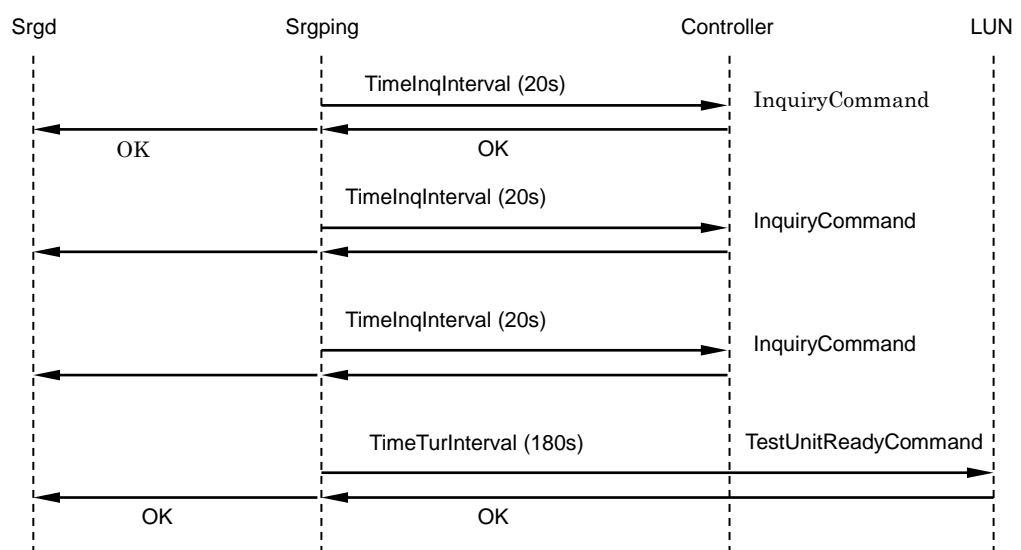
- (4) I/O リクエストのストール監視
 I/O パスに対して定期的に行う TestI/O の実行時刻を検査することで、OS 全体のストール状態を監視します。
 TestI/O が一定時間以内に正常完了しなければ、I/O パスを異常と判定します。

【I/O ストール監視のフレームワーク】

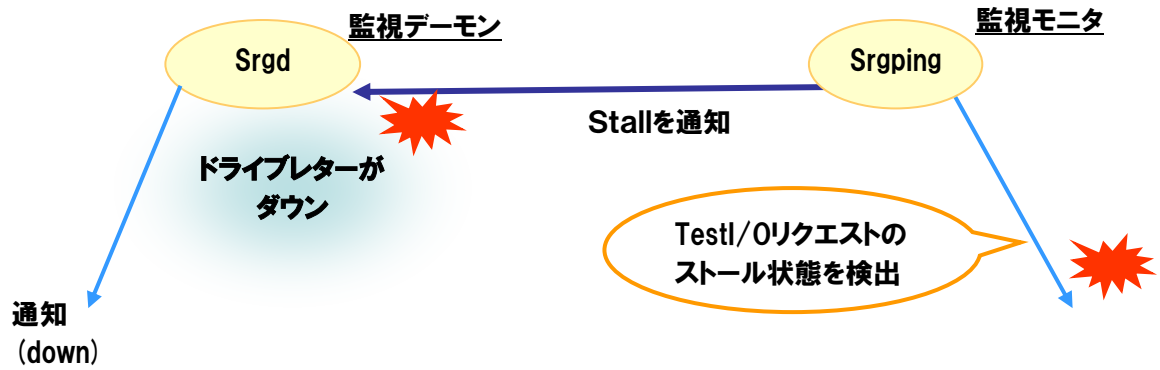


- TestI/O の正常なシーケンスは、以下のような動作になります。

I/O パスのストール監視時間	: TimeDiskStall	: 360 (秒)
コントローラ監視間隔	: TimeInqInterval	: 20 (秒)
LUN 監視間隔	: TimeTurInterval	: 180 (秒)

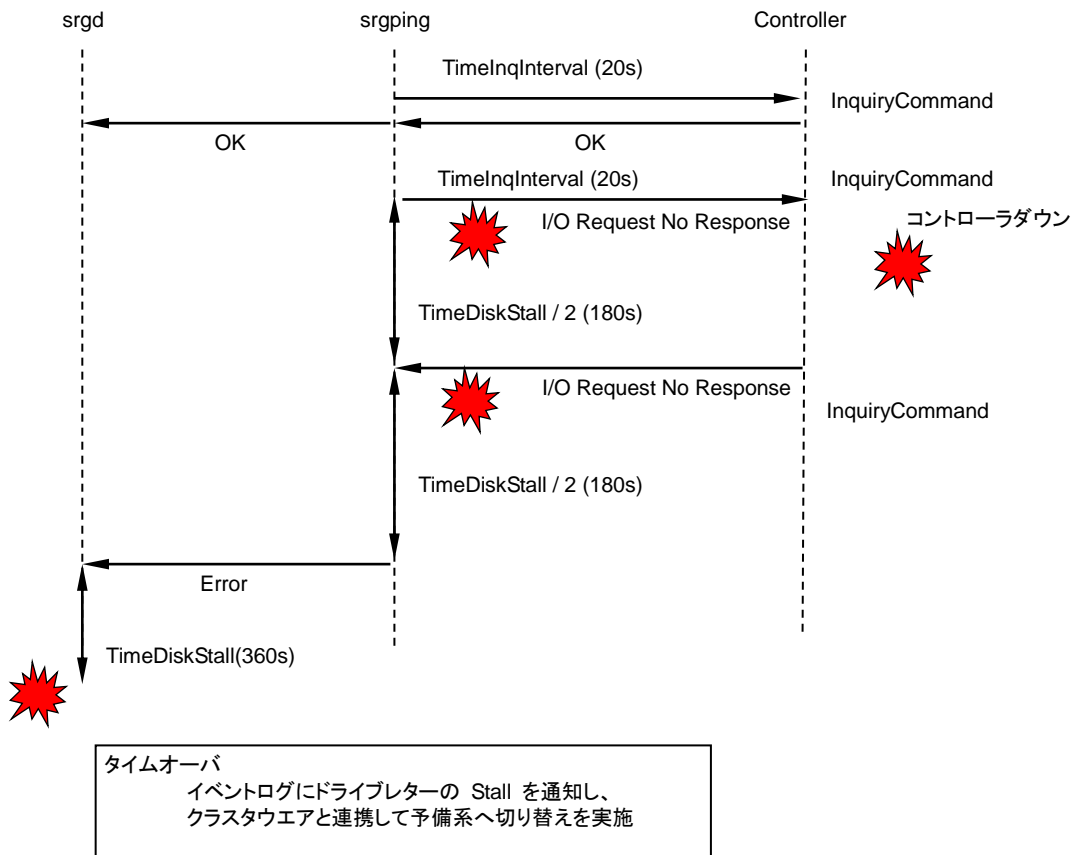


【I/O ストール状態を検出すると】



- TestI/O で I/O ストールを検出すると、以下のような動作になります。

I/O パスのストール監視時間	: TimeDiskStall	: 360(秒)
コントローラ監視間隔	: TimeInqInterval	: 20(秒)
LUN 監視間隔	: TimeTurInterval	: 180(秒)



3.3. リソース監視で異常検出時の動作

TestI/O で I/O パスの異常を検出すると、設定された対処を実行します。

TestI/O による監視項目は下記のとおりです。

- I/O パスの死活
- I/O リクエスト
- LUN アクセス

- (1) TestI/O で I/O パス死活監視の異常を検出
TestI/O に対して異常応答、タイムアウトを検出した場合の動作を以下のいずれかから選択できます。
 - I/O パスを閉塞する
 - I/O パスを閉塞しない

- (2) TestI/O で I/O リクエストのストールを検出
TestI/O に対して、OS レベルで無応答を検出すると I/O ストール状態と判定します。
I/O リクエストが I/O ストール監視時間(デフォルト 360 秒)の 1/2 以内に終了しない場合、復旧動作を試みます。更にストール監視時間の残り時間待ち合わせて終了しない場合、以下のオペレーションを選択できます。
 - ノードを切り替える
 - ノードを切り替えない

- (3) TestI/O で LUN へのアクセス不可を検出
LUN への TestI/O に対して異常応答を検出した場合、以下のオペレーションを選択できます。
 - ノードを切り替える
 - ノードを切り替えない

発生要因として以下の障害が考えられます。

- すべての I/O パス(全経路)で障害を検出
 - 全 FC スイッチ障害
 - 全 FC カード障害
 - 全 SCSI カード障害
 - ディスク装置本体の故障
- ソフトミラー構成で両系ディスク障害を検出
 - ディスク装置本体の故障

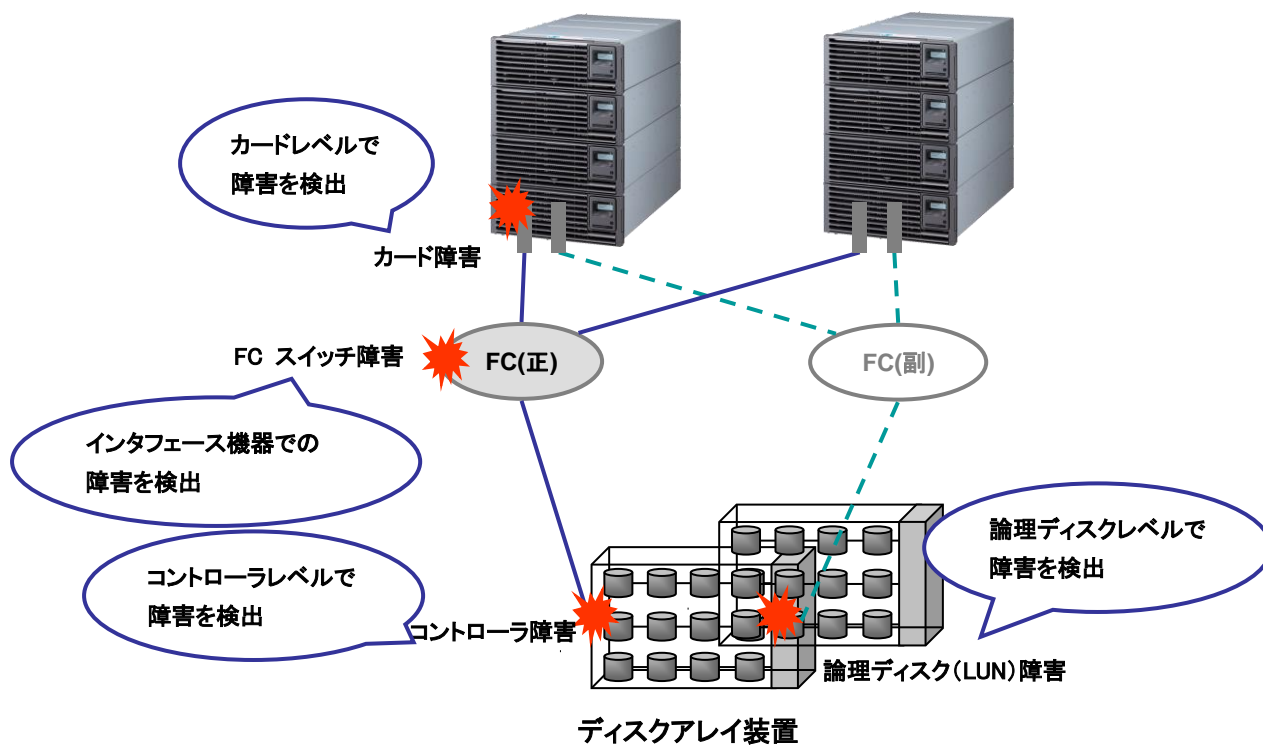
3.4. アクションの定義について

TestI/O で異常を検出した場合、下記のアクションを指定できます。

- I/O パスを自動閉塞する
- ノードを切り替える(クラスタウェア連動)

- (1) アクションを選択しない場合
アクションを選択しない場合でも、イベントログに障害メッセージを出力します。

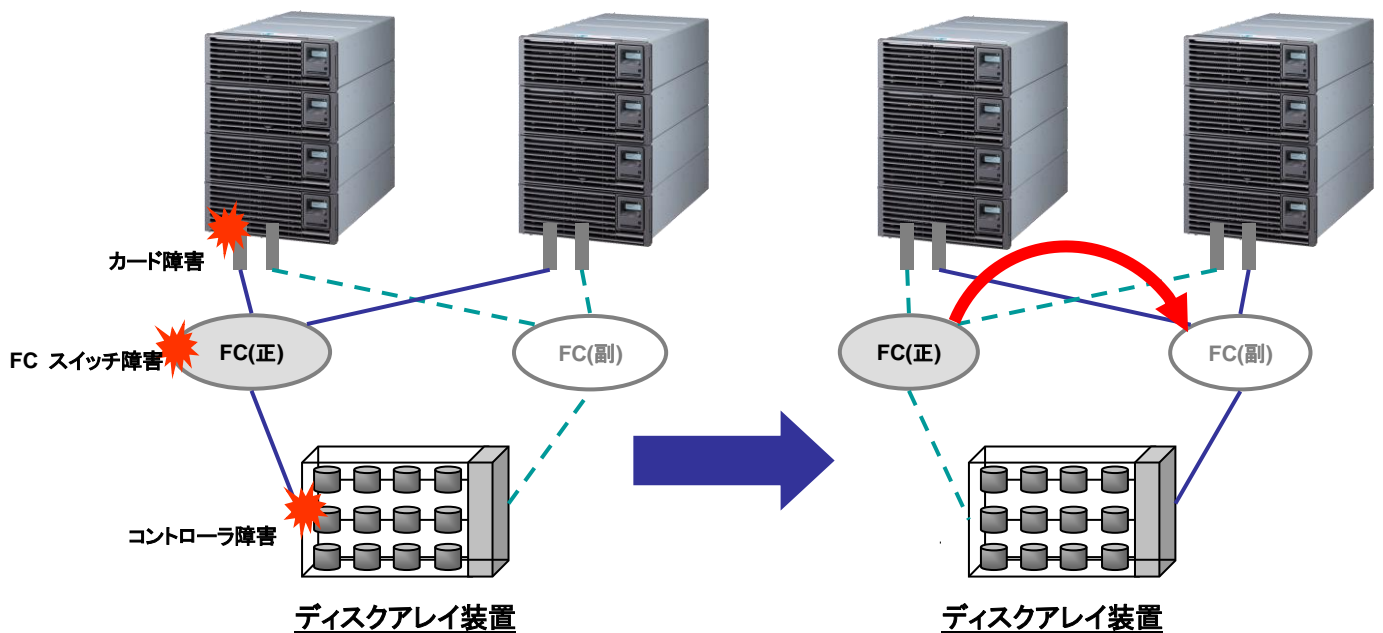
ディスクアレイ装置コントローラ、論理ディスクに対して定期的に TestI/O を発行することにより、ディスクアレイ装置、インタフェース機器の故障、間欠障害を検出し、障害情報をレポートします。



(2) I/O パスを自動閉塞する

FC インタフェース上でリンクダウンが断続的に発生すると I/O パスの切り替えが多発し、ユーザー I/O のリトライにより I/O 遅延が発生します。
この機能はリンクダウンなどの障害を検出した I/O パスを速やかに FC レイヤから切り離すことで、正常な I/O パスでの運用に切り替えます。

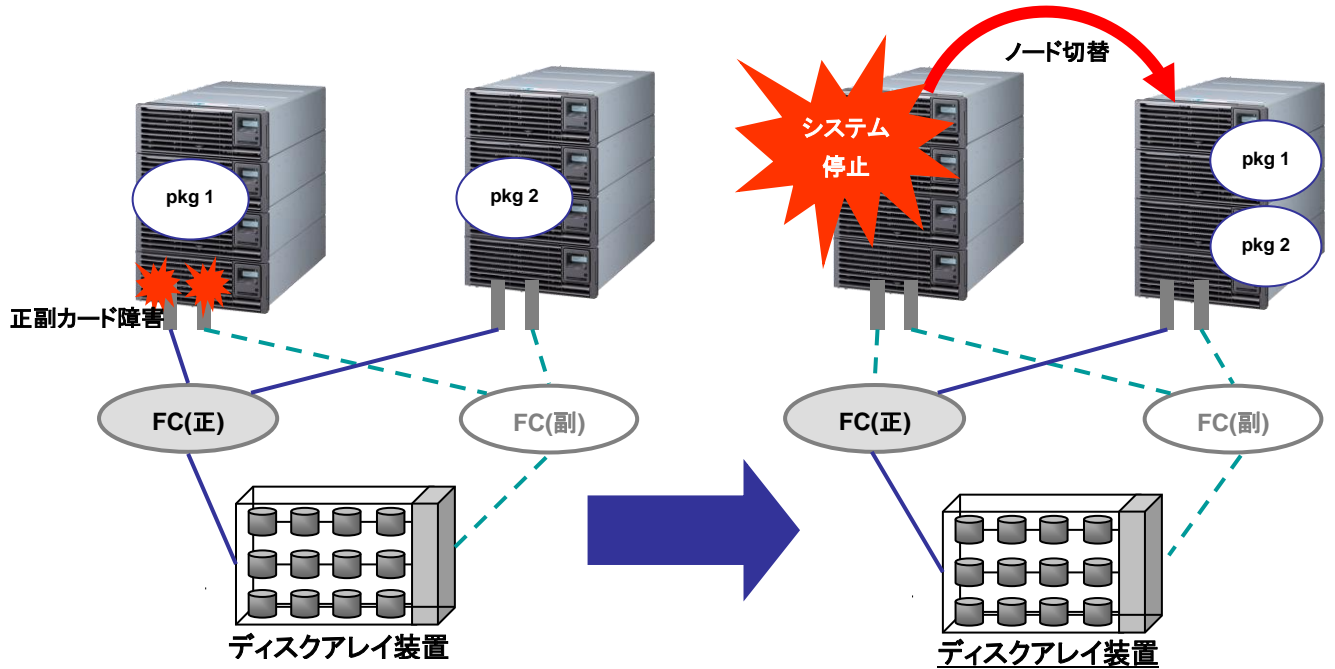
ディスクアレイ装置の信頼性を向上させるために、StoragePathSavior を使って I/O パスを冗長化する手法があります。
代替パス構成では、リンクダウンや機器故障により間欠障害が発生すると、I/O が遅延する問題を含んでいますが、障害箇所を早期に特定し故障箇所を切り離すことで、業務プロセスの I/O 遅延を防止します。



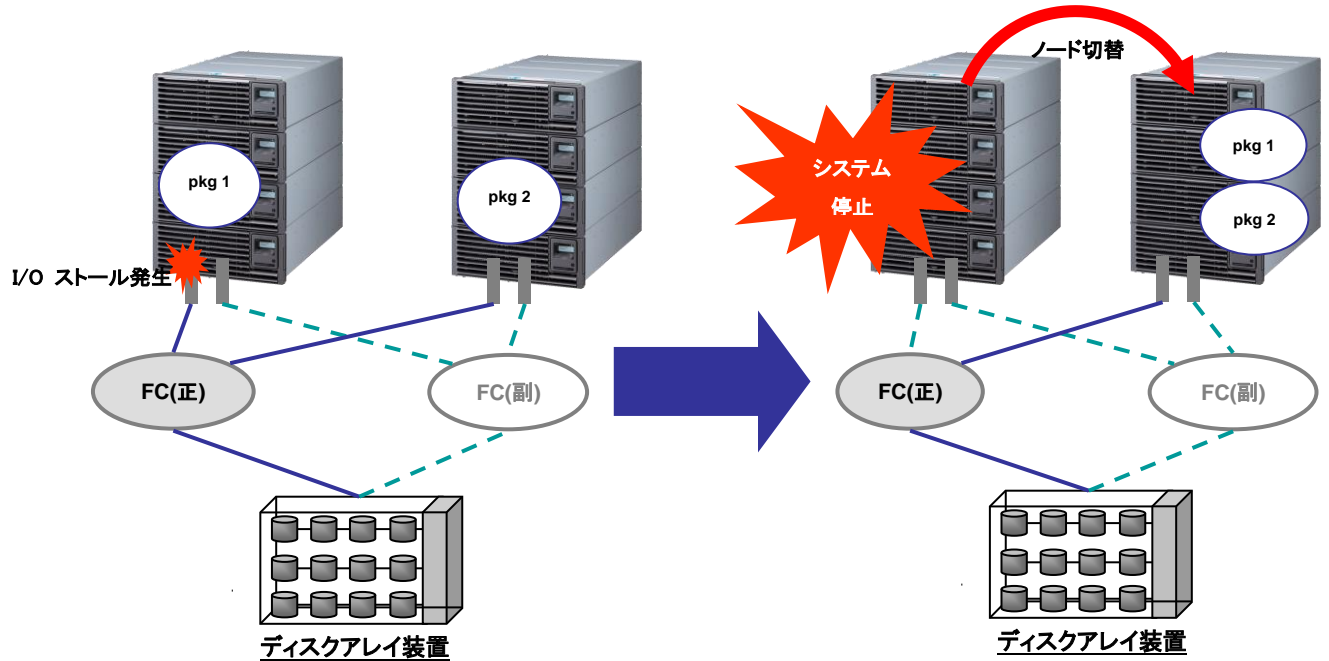
(3) ノードを切り替える

この機能は FC カードやスイッチなどの二重故障でディスク装置が利用できなくなり、業務の続行が不可能な状況に陥った場合に実行中の業務を待機ノードに切り替えます。クラスタウェアにより構築されたクラスタシステムで利用可能です。

共有ディスクへの I/O 処理が不可能になると(両系カード故障、両系 FC スイッチ故障)、待機ノードへ切り替えることで、業務を継続します。



共有ディスクへの I/O リクエストが一定時間経過しても完了しない場合は、I/O ストール状態と判断し、待機ノードへ切り替えることで、業務を継続します。



3.5. オンライン保守機能

(1) オンライン保守機能の目的

本製品は、Windows に接続されたディスク装置のオンライン保守を円滑に行うために専用のコマンドを提供します。

マルチパス管理製品で冗長化された I/O パスに対して、Windows の OS、業務ソフトウェアを停止することなくディスク装置の故障個所の特定、FW update といったオンライン保守の作業環境を提供します。

(2) オンライン保守ユーティリティの機能

本製品の提供する機能は以下のとおりです。

- ・ FC 単位の一括復旧機能
閉塞した I/O パスを、FC 単位で一括復旧します。
- ・ I/O パス単位の復旧、構成復旧
閉塞した I/O パスを、パス単位で復旧します。
- ・ I/O パスの構成復旧機能
すべての I/O パスに対して構成復旧を実行します。
- ・ 状態表示機能、TestI/O 機能
I/O パスの運用状態を FC 単位、パス単位で表示します。
コマンドベースで TestI/O を発行することで、I/O パスの稼動状態を知ることができます。

3.6. クラスタウェアとの連携機能について

本製品の提供するクラスタ連携機能を導入することで、クラスタウェアで構築したシステムにおいてストレージの障害発生時に、高速なノードの切り替えが実現できます。

以降、本製品ではクラスタウェア製品として、CLUSTERPRO を例に説明します。

連携機能は本体系障害、すべてのインタフェースカード障害、すべての FC スイッチ障害において有効ですが、ノードを切り替える手段として以下の手法があります。

- ① CLUSTERPRO の exec リソースにクラスタウェア連携デーモン (Srgstat) を登録する方式

具体的な連携の設定手順については、「6. CLUSTERPRO との連携」を参照してください。

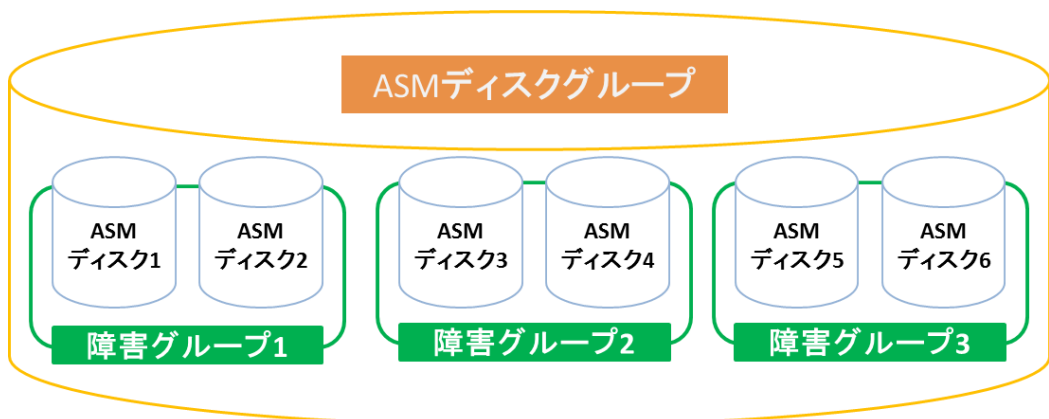
3.7. Oracle ASM 環境における StorageSaver による監視について

Oracle ASM の構成を監視する場合は、Oracle ASM が使用しているディスクに対する I/O パスに対して定期的に TestI/O を発行することで、I/O パスの障害を早期に検出します。ここではまず初めに Oracle ASM の構成概要について説明し、次に StorageSaver による Oracle ASM の構成監視と障害判定について説明します。

Oracle ASM の構成概要

Oracle ASM では基本的に ASM ディスクと呼ばれる論理ディスクによって、データを管理します。そして ASM ディスクは障害グループと呼ばれる単位でグルーピングされ、障害グループ単位でミラー構成が組み込まれます。さらに障害グループは ASM ディスクグループと呼ばれる単位でグルーピングされます。

ASM ディスク	: データを格納するための論理ディスク
障害グループ	: 複数の ASM ディスクをまとめたグループ
ASM ディスクグループ	: 複数の障害グループをまとめたグループ

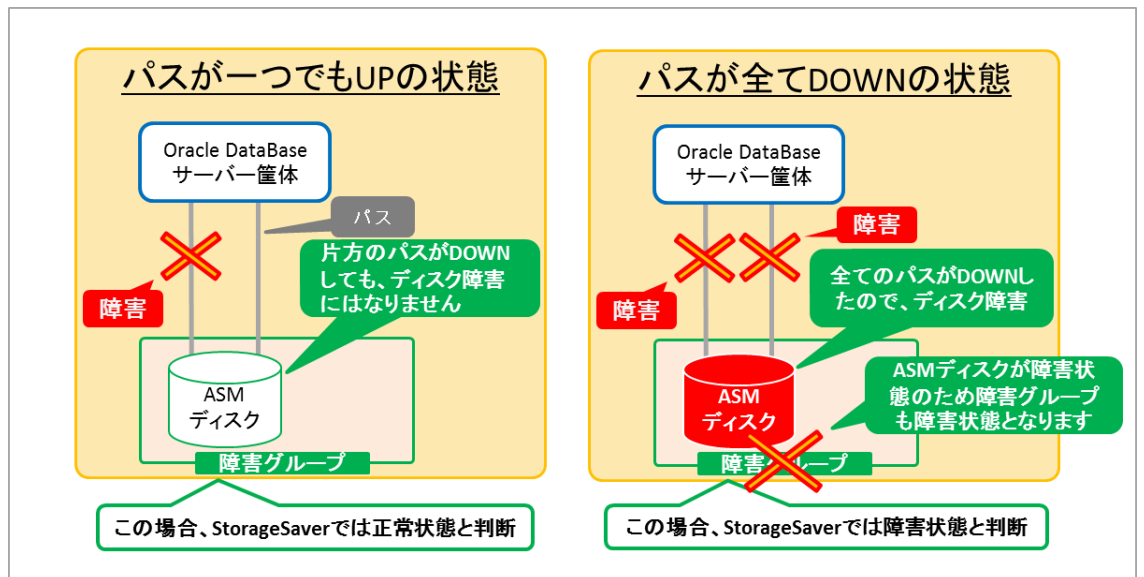


ASM ディスクグループは冗長性に関するパラメータも設定できます。これは各障害グループに、データのミラーを存在させるためのパラメータです。冗長性のタイプは以下の3つです。

- ・外部冗長性(ミラーなし)
- ・標準冗長性(2重ミラー)
- ・高冗長性(3重ミラー)

(1) Oracle ASM の構成監視と障害判定

StorageSaver では上記で説明した Oracle ASM の冗長性を考慮した障害検出を行います。ASM ディスクに対する I/O パスの監視を行い、以下のように全てのパスで障害が起きた場合、その ASM ディスクを障害状態とみなします。またそれにより障害と判定された ASM ディスクが所属する障害グループも障害状態とみなします。



最終的に障害状態の障害グループの数とASM ディスクグループに設定されている冗長性のタイプを比較し、結果毎に以下を検出します。

- ・正常状態
障害状態の障害グループ数 = 0
- ・部分障害
障害状態の障害グループ数 < ASM ディスクグループの冗長性
- ・両系障害
障害状態の障害グループ数 >= ASM ディスクグループの冗長性

(2) 設定ファイルの自動生成機能

Oracle ASM で使用している ASM ディスクの I/O パスを監視対象に組み込み、Oracle ASM の構成を考慮した設定ファイルの自動生成を行います。

Oracle ASM の構成を考慮した設定ファイルの詳細な作成手順については『4.3 Oracle ASM 使用環境における設定ファイルの自動生成』を参照してください。

StorageSaver がサポートするデバイス

Oracle ASM が ASM ディスクとして使用可能なデバイスと StorageSaver がサポートするデバイスは以下のとおりです。

Oracle ASM で使用可能なデバイス	StorageSaver のサポート有無
RawDevice	○※
NFS	×

※StorageSaver では一つのパーティションで一つのディスクを作成した構成のみ、サポート対象とします。

Oracle ASM のデータの冗長性を考慮した監視を行う場合には、以下の注意点ががあります。

- Oracle ASM においてファイル単位にミラーを設定している場合は、StorageSaver はデータの冗長性が失われていても異常と検出できません。
- StorageSaver では Oracle ASM が提供している機能であるリバランスによりデータの再配置が行われ、データの冗長性が回復しているかどうかの確認を行っていません。そのため、リバランスが行われ、データの冗長性が回復している場合でも、StorageSaver では異常を検出することがあります。

4. 設定ファイルの設定

4.1. 本製品の導入

(1) インストール

ストレージシステムの監視を行うには、StorageSaver のインストールが必要です。

※インストール手順についての詳細は、「CLUSTERPRO MC StorageSaver 2.1 for Windows インストールガイド」を参照してください。

(2) セットアップ

ディスク装置を監視するには、設定ファイルの作成が必要です。

設定ファイルは【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf 配下に作成します。

ファイル名は以下のとおりで、サンプルファイルが

【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥sample 配下に提供されています。

- システム定義ファイル (srg.config)
ノード一意で使用する 設定を定義したファイルです。
- 構成定義ファイル(srg.map)
I/O パス情報の論理構成を定義したファイルです。
- リソース定義ファイル(srg.rsc)
HBA カード(FC/SCSI カード)および I/O パスのリソース情報を
定義したファイルです。

設定ファイル自動生成コマンド Srgquery.exe を利用すると
デバイス情報を検索し 設定ファイルのテンプレートを自動生成できます。

4.2. 設定ファイルの自動生成手順

Srgquery.exe による設定ファイル自動生成の手順を説明します。

- (1) はじめに
クラスタウェアのクラスタ環境構築が完了している場合には、
Srgquery.exe により設定ファイルを自動生成することができます。

また、クラスタウェアを利用しないシングルノードの場合でも
ソフトミラーの構築を完了してから Srgquery.exe により設定ファイルを自動生成してください。

注意: 本バージョンではソフトミラー構成の設定ファイル自動生成は非サポートです。
次期バージョンでサポート予定です。

- (2) Srgquery.exe による設定ファイル自動生成
設定ファイルは、Srgquery.exe により自動的に作成されます。
一般的に使用する引数は下記のとおりです。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSyncSaver\bin\Srgquery.exe -s <格納ディレクトリ>
```

・PowerPath を導入した EMC ディスク装置を対象にした場合

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSyncSaver\bin\Srgquery.exe -p -s  
<格納ディレクトリ>
```

注意: 格納ディレクトリには、【インストールフォルダ】\HA\StorageSyncSaver\conf を
指定しないようにしてください。

(3) 設定ファイルの確認、適用手順

設定ファイルを新規に作成、または変更した場合、Srgconfig.exe によりその妥当性および相関関係を確認した後にシステムに適用してください。

設定ファイルを実行環境に適用した場合は、サービスの再起動が必要です。

1. 設定ファイルの妥当性の確認手順

```
C:> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -c -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

2. 設定ファイルの実行環境への適用手順

```
C:> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -a -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

注意:<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ> に【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf を指定して、Srgconfig.exe を実行すると、下記メッセージが出力されますが、Srgconfig.exe -c を実行して問題がなければ、サービスの再起動を実施しても問題ありません。
別のプロセスで使用されているため、プロセスはファイル '【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.config' にアクセスできません。

3. サービスの再起動

```
C:> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -r
```

(4) 注意事項

- ・ 設定ファイルのバックアップについて
設定ファイル(【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf 配下)は、バックアップすることをお奨めします。再インストールする場合の復旧手順が容易となります。
- ・ 設定ファイルの更新時の注意
接続されているディスクの構成や監視ポリシーを変更した場合は、設定ファイルの再作成、サービスの再起動が必要です。
- ・ 設定ファイル自動生成のサポート構成について
設定ファイル自動生成機能は設定ファイル作業軽減のため、設定ファイルのテンプレートを作成する機能であり、すべてのディスク構成をサポートしているわけではありません。
したがって、構成によっては作成できない場合もあります。必ず作成された 設定ファイルを確認し、実際の環境と差異がある場合には手動で修正してください。

また、本バージョンではソフトミラー構成の設定ファイル自動生成は非サポートです。

4.3. Oracle ASM 環境における設定ファイルの自動生成

Oracle ASM の構成を監視する環境での Srgquery.exe による設定ファイル自動生成の手順を説明します。

※設定ファイルの自動生成を行う場合は、Oracle の Grid Infrastructure をインストールしたユーザでログインしてください。

(1) はじめに

- ・ 設定ファイルの自動生成を行うサーバで ASM インスタンスが起動されていることを以下のコマンドで確認してください。

```
C:¥> tasklist /svc | findstr "oracle"
oracle.exe                9992 OracleASMSvc<ASM インスタンスの SID>
```

- ・ ログインユーザの環境変数に以下の 2 つが設定されていることを確認してください。
 - ・ ORACLE_HOME
 - ・ ORACLE_SID

(2) Srgquery.exe による設定ファイル自動生成

Srgquery.exe を実行し、設定ファイルテンプレートを作成します。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgquery.exe -o -s <格納ディレクトリ>
```

注意: 格納ディレクトリには、【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf を指定しないようにしてください。

(3) 設定ファイルの変更

- ・ Oracle ASM の設定でミラー化レベルの変更を行った場合は、手動で srg.map の ASM_MIRROR の値をミラー化レベルに合わせて変更してください。
なお、デフォルトのミラー化レベルから変更していない場合は、ASM_MIRROR の値を変更する必要はありません。
※Oracle ASM のディスクグループの冗長性タイプを標準冗長性に設定した場合、Oracle によってサポートされるミラー化レベルは、双方向(2重ミラー)、3方向(3重ミラー)、非保護(ミラーなし)の3つとなります。しかし、StorageSaver では、デフォルトのミラー化レベル以外の値を手動で設定した場合、どのミラー化レベルを設定したのかを判断することができません。このため、Oracle ASM の構成を考慮した設定ファイルの自動生成を行う際は、どの冗長性タイプが設定されている場合でもデフォルトのミラー化レベルを設定します。

```
PKG pkg1
DRIVELETTER ASMDG1
VOL_TYPE VOL_ASM
FSTYPE RawDevice ASM_MIRROR_3 ←ASM_MIRROR の値を変更※
```

※設定する ASM_MIRROR の値については、『4.4 設定ファイルの記述』の FS_TYPE の項目を参照してください。

(4) 設定ファイルの確認、適用手順

設定ファイルを新規に作成、または変更した場合、Srgconfig.exe によりその妥当性および相関関係を確認した後にシステムに適用してください。

設定ファイルを実行環境に適用した場合は、サービスの再起動が必要です。

1. 設定ファイルの妥当性の確認手順

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -c -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

2. 設定ファイルの実行環境への適用手順

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -a -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

注意:<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ> に【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf を指定して、Srgconfig.exe を実行すると、下記メッセージが出力されますが、Srgconfig.exe -c を実行して問題がなければ、サービスの再起動を実施しても問題ありません。
別のプロセスで使用されているため、プロセスはファイル '【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.config' にアクセスできません。

3. サービスの再起動

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -r
```

(5) 注意事項

Oracle ASM の構成を監視する環境での設定ファイルの自動生成の際には、以下の注意点があります。

- ・ Oracle ASM の状態として、mount 状態にある ASM ディスクグループのみ設定ファイル自動生成の対象となります。
- ・ Oracle ASM の構成を監視する場合は自動復旧機能を無効にしてください。

4.4. 設定ファイルの記述

(1) システム定義ファイルの設定について

設定ファイル名は以下のとおりです。

【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.config

以下に使用するキーワードを記述します。

項目	説明
TimeDiskFault	ドライブレターの障害検出時間を指定します。 各ドライブレター配下の I/O パスに対する TestI/O が失敗し始めてからドライブレターを異常と判定する時間を指定します。 このパラメータはデフォルト値を使用することを推奨します。 指定値は 30 秒～、デフォルト 60 秒
TimeLinkdown	I/O パスの障害検出時間を指定します。 TestI/O が失敗し始めてから I/O パス障害と判定する時間を指定します。 指定値は 10 秒～、デフォルト 180 秒
TimeInqInterval	コントローラ監視間隔を指定します。 ディスク装置コントローラへの TestI/O インターバルを指定します。 FC カード、インタフェース機器、ディスク装置コントローラの障害検出時間を短縮したい場合は、本パラメータを調整してください。 指定値は 10 秒 ~ 86400 秒(1 日)、デフォルト 20 秒
TimeTurInterval	LUN 監視間隔を指定します。 ディスク装置論理ディスクへの TestI/O インターバルを指定します。 LUN の障害検出時間を短縮したい場合は、本パラメータを調整してください。 また、LUN の監視が不要な場合は、0 秒を指定すると論理ディスクへの TestI/O は行いません。 指定値は 0 秒、10 秒～、デフォルト 180 秒 TimeInqInterval で指定した値よりも大きく、かつ整数倍である必要があります。
TestIOFaultAction	TestI/O 異常検出時のアクションを指定します。 ActionNone アクション指定なし。デフォルトです。 イベントログに障害情報を通知しません。 BlockPath I/O パスを自動閉塞します。 障害が発生した I/O パスの切り離しを行います。

DiskFaultAction	ドライブレター異常検出時のアクションを指定します。	
	ServiceCmdDisable	アクション指定なし。デフォルトです。 イベントログに障害情報を通知します。
	ServiceCmdEnable	Srgstat.exe が停止します。 CLUSTERPRO にて Srgstat.exe を監視し、Srgstat.exe の消滅を検知することでノードを切り替えます。
	TocExec	OS を強制停止させます。
TestIOUse	TestI/O 実行可否を指定します。	
	ENABLE	TestI/O を行う(デフォルト)
	DISABLE	TestI/O を行わない。
AutoRecovery	監視ステータス自動復旧の実行可否を指定します。 障害発生時、故障個所が障害状態から復旧したことをオペレータが確認した上で監視ステータスを復旧していただくため、本パラメータは DISABLE に設定することを推奨します。 運用上、オペレータによる確認が困難である場合は、本パラメータを ENBALE に設定することで自動復旧機能を利用することができます。 Oracle ASM の構成を監視する場合は常に DISABLE を指定してください。	
	ENABLE	自動復旧を行う。 障害状態から復旧した I/O パスを自動的に組み込み、監視を再開します。 自動復旧を行う時間は、「DailyCheckTime」に指定された時間となります。
	DISABLE	自動復旧を行わない。デフォルトです。 障害状態から復旧した場合にはオペレータによる確認、手動での復旧が必要です。
TestIOMode	TestI/O の発行方法を指定します。	
	Inq	Inquiry を発行します。
	InqTurRead	Inquiry と TestUnitReady、Read(10) を発行します。
	Read	DirectRead を発行します。
	InqTur	Inquiry と TestUnitReady を発行します。デフォルトです。
TIOMonitor	間欠障害監視機能の使用可否を指定します。 デフォルトではコメントアウトされています。 間欠障害監視機能を使用する場合にのみ本パラメータを有効にしてください。	
	DISABLE	間欠障害監視機能を使用しません。 デフォルトです。
	ENABLE	間欠障害監視機能を使用します。
TIOFilePath	間欠障害監視機能のログ出力先を指定します。 デフォルトではコメントアウトされています。 間欠障害監視機能を使用する場合にのみ本パラメータを有効にしてください。	

TIOFileSize 間欠障害監視機能のログファイルのサイズを Mbyte 単位で指定します。
 デフォルトではコメントアウトされています。
 間欠障害監視機能を使用する場合にのみ本パラメータを有効にしてください。
 最小値は 1Mbyte、デフォルトは 1Mbyte

注意: 上記タイマ値で上限値のないものは MAXINT まで指定可能ですが、
 常識的な運用での適用を推奨します。

これ以降のパラメータは変更できません。変更する場合は開発部門までお問い合わせください。

項目	説明
BaseTimer	基本タイマを指定します。 指定値は 0 秒～、デフォルト 10 秒
TimeDiskStall	監視リソースの I/O ストールを判定する時間を指定します。 このパラメータはデフォルト値を使用することを推奨します。 指定値は 60 秒 ~ 86400 秒(1 日)、デフォルト 360 秒
DiskStallAction	I/O ストール検出時のアクションを指定します。 ServiceCmdDisable アクション指定なし。デフォルトです。 イベントログに障害情報を通知しません。 ServiceCmdEnable Srgstat.exe が停止します。 CLUSTERPRO にて Srgstat.exe を監視し、Srgstat.exe の消滅を検知することでノードを切り替えます。 TocExec OS を強制終了させます。
WaitTestIOInterval	TestI/O でパススルードライバに指定する I/O 待ち合わせ時間を指定します。 このパラメータはデフォルト値を使用することを推奨します。 指定値は 1 秒 ~ 108000 秒(30 時間)、デフォルト 5 秒
DailyCheckTime	障害の発生している I/O パスをイベントログへ定期通知する時刻を指定します。 自動復旧機能を使用する場合、ここで指定した時刻に自動復旧を行います。 指定値は 0 ~ 23、デフォルト 10(10:00) です。
ExecSyncEnable	I/O パスの状態について定期的に同期を取るかを指定します。 ENABLE 定期同期を行う(デフォルト) DISABLE 定期同期を行わない。
TimeReadInterval	ディスク装置論理ディスクへの TestI/O(Read10 command)のインターバルを指定します。TestI/O(Read10 command)を行う場合は、本パラメータに TimeTurInterval の値を設定します。 また、0 秒を指定すると TestI/O(Read10 command)は行いません。 指定値は 0 秒、10 秒～、デフォルト 0 秒 仮想化環境でお使いの場合には、本パラメータを設定してください。 推奨値は 180 秒です。

TestIOModeMPIO

Windows の Multipath I/O (MPIO) 機能を使用した TestI/O を行うかどうかを指定します。Microsoft が提供しているパッチ (KB2277904) を適用した Windows Server 2008 R2 以外では DISABLE を設定してください。

ENABLE

MPIO を使用する。

DISABLE

MPIO を使用しない。(デフォルト)

TocExecLevel

TocExec 時の OS の停止方法をしていきます。

- 1 プロセスを強制的に終了させて、マシンの電源を切りま
す。
- 2 プロセスを強制的に終了させて、マシンの電源が切れる
状態にします。
- 3 プロセスを終了させて、マシンの電源を切ります。
- 4 プロセスを終了させて、マシンの電源を切れる状態にし
ます。(デフォルト)

注意: 上記タイマ値で上限値のないものは MAXINT まで指定可能ですが、
常識的な運用での適用を推奨します。

(2) リソース定義ファイルの設定について

設定ファイル名は以下のとおりです。

【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.rsc

以下に使用するキーワードを記述します。

項目	説明
FC	HBA 情報を定義します。 管理対象となる HBA カード情報の定義です。 SCSI 接続のカードの場合は、FC ではなく SCSI を指定します。 alias 名 FC を特定する任意の名称を指定します。 デフォルトは、fcx (x は1からの通番)
DISK	I/O パス情報を定義します。 FC 配下の I/O パス情報を定義します。 複数の I/O パスが存在する場合は、本パラメータを列記します。 ディスクタイプ ディスク種別を指定します。 IStorageSeries NEC 社製 iStorage シリーズ SymmetrixSeries EMC 社製 Symmetrix シリーズ/VMAX シリーズ ClarixSeries EMC 社製 CLARiX シリーズ/VNX シリーズ XtremIOSeries EMC 社製 XtremIO シリーズ SanriseSeries 日立社製ディスク装置 Other その他ディスク装置 path I/O パスの経路を示すパス情報を指定します。 パス情報は以下の形式です。 Port::PathID:TargetID:Lun

注意:FC パラメータと複数の DISK パラメータの組み合わせをひとつのセットで指定してください。

(3) 構成定義ファイルの設定について

設定ファイル名は以下のとおりです。

【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.map

以下に使用するキーワードを記述します。

項目	説明
< 構成定義 >	
リソース情報	I/O パスの論理的な構成を指定します。
PKG	任意の文字列を PKG 名として指定します。 PKG 名は pkgxxxx(xxxx は 0001 ~ 9999)となるノード一意の数字です。
DRIVELETTER	OS で割り当てられたドライブレターを指定します。 以下の形式で記載します。 C: (最後にコロンを記載) Oracle ASM の構成を監視する場合は Oracle ASM のディスクグループ名を指定します。
VOL_TYPE	デフォルトでは使用しません。省略してください。 ディスクのボリュームタイプを指定します。 VOL_ASM Oracle ASM の構成を監視する場合に指定します。
RscAction	デフォルトでは使用しません。省略してください。 ドライブレター単位で、ドライブレター障害発生時のアクションを変えたい場合に指定します。 Oracle ASM の構成を監視する場合は ASM ディスクグループ単位で障害発生時のアクションを変えたい場合に指定します。 ServiceCmdDisable Srgstat.exe が停止しません。 ServiceCmdEnable Srgstat.exe が停止します。 TocExec OS を強制停止させます。 ※ 指定可能な値は、srg.config の DiskFaultAction に指定する値と同一です。 省略された場合は、DiskFaultAction に指定されているアクションを実行します。
FSTYPE	ファイルシステムタイプ ディスクのファイルシステムを指定します。 デフォルトでは使用しません。省略可能です。 Ntfs ディスクを NTFS でフォーマットしている場合に指定します。 Fat32 ディスクを Fat32 でフォーマットしている場合に指定します。 RawDevice 上記以外の場合に指定します。 Oracle ASM 冗長性 Oracle ASM の構成を監視する場合は、Oracle ASM の冗長性によるパラメータを指定します。 パラメータの設定値は以下のとおりです。 ASM_MIRROR_1 Oracle ASM で使用されている冗長性が外部冗長性(ミラーなし)の場合に指定します。 ASM_MIRROR_2 Oracle ASM で使用されている冗長性が標準冗長性(2重ミラー)の場合に指定します。

ASM_MIRROR_3 Oracle ASM で使用されている冗長性が高冗長性 (3 重ミラー) の場合の場合に指定します。

GROUP	グループ	任意の文字列を GROUP 名として指定します。 GROUP 名は groupxxxx (xxxx は 0001 ~ 9999) となるノード一意の数字です。 GROUP 定義には DISK 定義が必須となります。 Oracle ASM の構成を監視する場合は ASM ディスク単位で指定します。
	ミラーグループ	ミラー構成を定義している場合は、ミラー番号を指定します。 GROUP 名とミラー番号の間にはスペースが必要です。 ミラー番号は mirrorxxxx (xxxx は 0001 ~ 9999) となるノード一意の数字です。 Oracle ASM の構成を監視する場合は障害グループ単位で指定します。
DISK		経路を表す I/O パス情報をすべて指定します。 複数の I/O パスが存在する場合は、本パラメータを列記します。

(4) 設定ファイルの設定例

システム定義ファイル

```
#####  
# User Config Area  
#####  
  
# TestI/O interval timer for Disk is failed (seconds)  
#   Disk status changes fail between this timer  
# minimum = 30, default = 60  
TimeDiskFault    60  
  
# FC linkdown detected timer value (seconds)  
# minimum = 10, default = 180  
TimeLinkdown    180  
  
# TestI/O(Inquiry) interval timer value (seconds)  
#   exec normal TestI/O for PV between this timer  
# minimum = 10, max = 86400(1day), default = 20  
TimeInqInterval  20  
  
# TestI/O(TestUnitReady) interval timer value (seconds)  
#   exec normal TestI/O for Disk between this timer  
# minimum = 0, default = 180. 0 mean TestUnitReady not run  
TimeTurInterval  180  
  
# TestI/O fault action  
# select ActionNone(default), BlockPath  
TestIOFaultAction  ActionNone  
  
# disk fault action  
# select ServiceCmdDisable(default), ServiceCmdEnable  
DiskFaultAction   ServiceCmdDisable  
  
# TestI/O use flag  
# used = ENABLE(default) : unused =  DISABLE  
TestIOUse    ENABLE  
  
# Auto recovery flag  
# used = ENABLE : unused = DISABLE(default)  
AutoRecovery  DISABLE  
  
# TestI/O mode  
# select Inq, InqTurRead, Read, InqTur(default)  
TestIOMode    InqTur  
  
#####  
# For STSINFO  
#####  
  
# Monitor intermittent fault.  
# monitor = ENABLE : not monitor = DISABLE (default)  
#TIOMonitor  DISABLE  
  
# Set the file path for log directory (for output).  
# The path is full set.  
#TIOFilePath C:¥Program Files¥HA¥StorageSaver¥log
```

```

# Size (M byte) of backup file.
# minmum = 1, default = 1
#TIOFileSize 1

#####
# Development Config Area
# do not touch this field
#####

# srgping status check timer (seconds)
# default = 10
BaseTimer 10

# I/O stall interval timer for Disk is failed (seconds)
# Disk status changes fail between this timer
# minimum = 60, default = 360. 0 mean I/O stall nocheck.
TimeDiskStall 360

# Disk stall find action
# select ServiceCmdDisable(default), ServiceCmdEnable
DiskStallAction ServiceCmdDisable

# Wait I/O for spt driver timer value (seconds)
# wait TestI/O between this timer
# minimum = 1, default = 5
WaitTestIOInterval 5

# Daily check time for check Disk status (o'clock)
# default = 10
DailyCheckTime 10

# Disk status sync flag
# used = ENABLE(default) : unused = DISABLE
ExecSyncEnable ENABLE

# TestI/O(Read10) interval timer value (seconds)
# exec normal TestI/O for Disk between this timer
# minimum = 0, default = 0. 0 mean Read10 not run
TimeReadInterval 0

# Test I/O mode change MPIIO or SCSI
# MPIIO = ENABLE, SCSI = DISABLE(default)
TestIOModeMPIIO DISABLE

# TocExec Level
# Poweroff and Force = 1, Shutdown and Force = 2
# Poweroff and Forceifhung = 3, Shutdown and Forceifhung = 4(default)
TocExecLevel 4

```

構成定義ファイル

```
PKG    pkg1
DRIVELETTERG:
FSTYPE Ntfs
GROUP  group0001
DISK   1:0:0:0
DISK   2:0:0:0
DRIVELETTERH:
FSTYPE Ntfs
GROUP  group0002
DISK   1:0:0:1
DISK   2:0:0:1

PKG    pkg2
DRIVELETTERI:
FSTYPE Ntfs
GROUP  group0003
DISK   1:0:0:3
DISK   2:0:0:3
```

リソース定義ファイル

```
FC fc1
#DiskNum 0 G:
DISK IstorageSeries 1:0:0:0
#DiskNum 1 H:
DISK IstorageSeries 1:0:0:1
#DiskNum 3 I:
DISK IstorageSeries 1:0:0:3
```

```
FC fc2
#DiskNum 0 G:
DISK IstorageSeries 2:0:0:0
#DiskNum 1 H:
DISK IstorageSeries 2:0:0:1
#DiskNum 3 I:
DISK IstorageSeries 2:0:0:3
```

5. 操作・運用手順

5.1. 運用管理コマンドの操作手順

(1) リソース監視の状態を表示します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:     : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : extended
DISK  : up       : up       : extended
I:     : up       : pkg2
DISK  : up       : up       : extended
DISK  : up       : up       : extended
```

```

C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe
(monitor status = TRUE)
=====
リソース監視の有効/無効を表示します
type  : L status : P status : Online status
=====
G:    : up      : pkg1
DISK : up      : up      : extended
DISK : up      : up      : extended
I:    : up      : pkg2
DISK : up      : up      : extended
DISK : up      : up      : extended
=====

```

① DriveLetter の監視状態を表示します。

- up** PKG を構成するすべての I/O パスが正常に動作している状態です。
- suspend** PKG を構成する I/O パスの一部に異常があり、片パスで運用されている状態です。
- down** PKG を構成する I/O パスに異常があり、DriveLetter が利用不可能な状態です。

② I/O パスの論理ステータス(管理状態)を L status として表示します。

表示	意味
up	正常動作中
down	障害状態
----	監視していない

③ I/O パスの物理ステータス(TestI/O の実行状態)を P status として表示します。

表示	意味
up	正常動作中
down	障害状態
----	監視していない

④ I/O パスの組み込み状態(Online status)を表示します。

表示	意味
extended	組み込み済み
reduced	閉塞状態
alive	内部の監視状態の同期が一部取れていない
unknown	状態不明

(2) I/O パスが異常になるとステータスがダウン状態になります。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====
G:    : suspend : pkg1
DISK : down     : down       : extended
DISK : up        : up          : extended
l:    : up        : pkg2
DISK : up        : up          : extended
DISK : up        : up          : extended
```

③ DriveLetter のステータス
② I/O パスの論理ステータス
① I/O パスの物理ステータス

- ① TestI/O で片系の I/O 障害を検出すると、物理ステータスが down になります。
- ② 障害発生から TimeLinkdown 秒後に、論理ステータスが down になります。
- ③ さらに、DriveLetter の監視状態が suspend になります。

設定ファイルの TestIOFaultAction 値を BlockPath に設定している場合、I/O パスの異常検出時に自動で閉塞します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====
G:    : suspend : pkg1
DISK : down     : down       : reduced
DISK : up        : up          : extended
l:    : up        : pkg2
DISK : up        : up          : extended
DISK : up        : up          : extended
```

③ DriveLetter のステータス
② I/O パスの論理ステータス
④ I/O パスの組み込み状態
① I/O パスの物理ステータス

- ① TestI/O で片系の I/O 障害を検出すると、物理ステータスが down になります。
- ② 障害発生から TimeLinkdown 秒後に、論理ステータスが down になります。
- ③ さらに、DriveLetter の監視状態が suspend になります。
- ④ I/O パスの状態を示す Online status が閉塞状態である reduced になります。

(3) 両系の I/O パスが異常になると DriveLetter レベルのステータスもダウン状態になります。

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe
(monитор status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:    : down    : pkg1
DISK : down    : down    : extended
DISK : down    : down    : extended
l:    : up      : pkg2
DISK : up      : up      : extended
DISK : up      : up      : extended
```

③ DriveLetter のステータス

② I/O パスの論理ステータス

① I/O パスの物理ステータス

①、②、③ TestI/O で両系の I/O 障害を検出すると、障害発生から TimeDiskFault 秒後に、DriveLetter の監視状態が down になります。

(4) -i オプションを付与すると詳細情報を表示します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monитор status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:    : up      : pkg1
DISK : up      : up      : extended
:    : 1:0:0:0
DISK : up      : up      : extended
:    : 2:0:0:0
l:    : up      : pkg2
DISK : up      : up      : extended
:    : 1:0:0:1
DISK : up      : up      : extended
:    : 2:0:0:1
```

① LUN への経路を示すパス情報

① LUN への経路を示すパス情報を表示します。

(5) リソース監視の停止と再開について

TestI/O の一時的な停止、再開をノード一意で指定します。
リソース監視停止中は、モニタステータスが FALSE になります。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -c stop
Change TESTIO.
START -> STOP
```

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = FALSE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====:=====:=====:=====
G:    : up       : pkg1
DISK : up       : up       : alive
      : 1:0:0:0
DISK : up       : up       : alive
      : 2:0:0:0
I:    : up       : pkg2
DISK : up       : up       : alive
      : 1:0:0:1
DISK : up       : up       : alive
      : 2:0:0:1
```

再開する場合は start を指定してください。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -c start
Change TESTIO.
STOP -> START
```

(6) サービスの起動、終了について

本製品は、インストール時に Windows サービスとして登録されますので、OS 起動時に自動的に監視を開始します。

- サービスコントロールマネージャーからの起動、終了

OS 起動(boot)を契機に自動起動、OS 終了を契機に自動終了されます。

- マニュアル起動、終了

[スタート]メニュー - [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] を開きます。

サービスの一覧が表示されますので、[HA StorageSaver] を選択、右クリックし、開始を選択すると起動できます。停止を選択するとサービスを終了できます。

また、コマンドからの起動、終了も可能です。

以下のコマンドで起動できます。

```
C:¥> net start "HA StorageSaver"
```

以下のコマンドで終了できます。

```
C:¥> net stop "HA StorageSaver"
```

上記手順で終了しない場合は、tasklist | findstr Srg で Srg から始まるプロセスの pid を検索して、taskkill /F /PID <pid> で終了させてください。

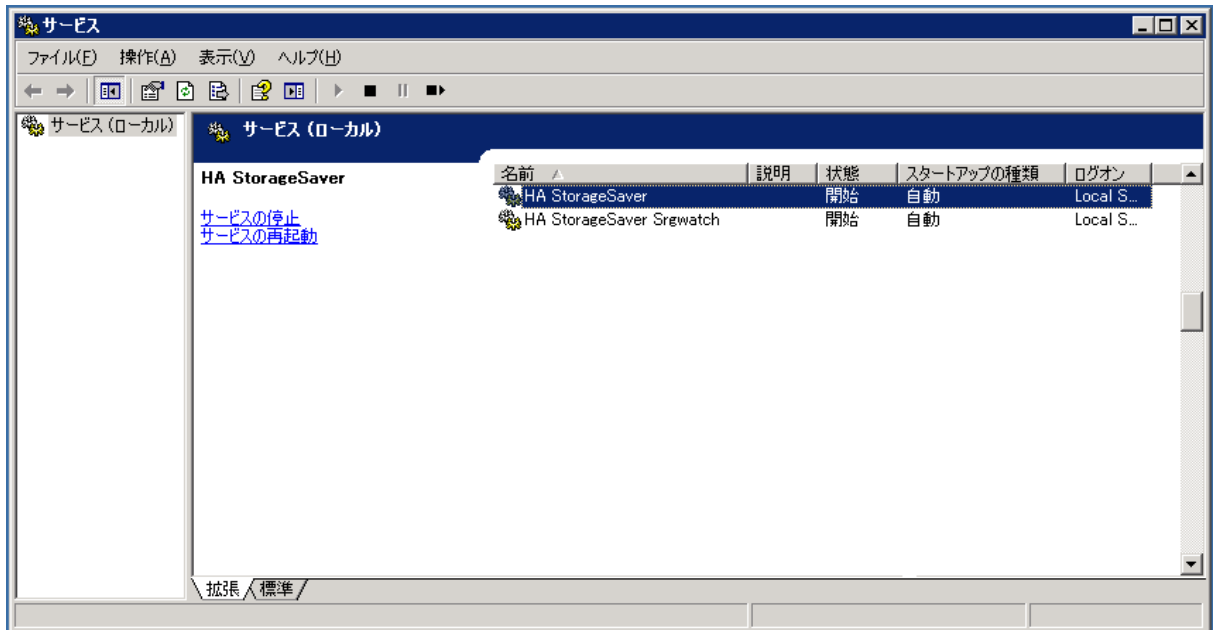
注意:[HA StorageSaver Srgwatch] を起動している場合は、
[HA StorageSaver Srgwatch] を停止後に、[HA StorageSaver] を停止してください。

(7) サービスの自動起動を一時停止したい場合

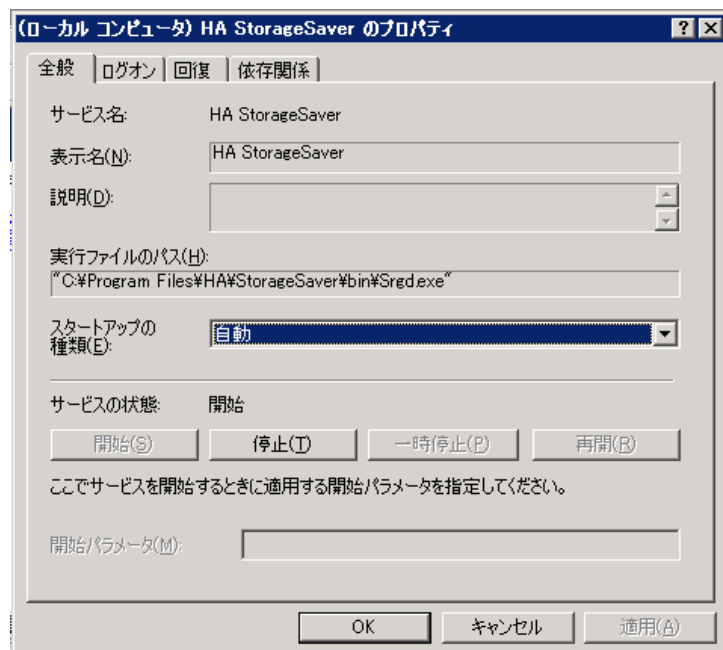
メンテナンスなどで OS 起動時にディスク監視を行いたくない場合には、以下の手順で監視の停止が可能です。

-OS 起動前に、サービスのプロパティを変更します。

[スタート] メニュー - [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス]
上記手順により、下記画面を表示します。

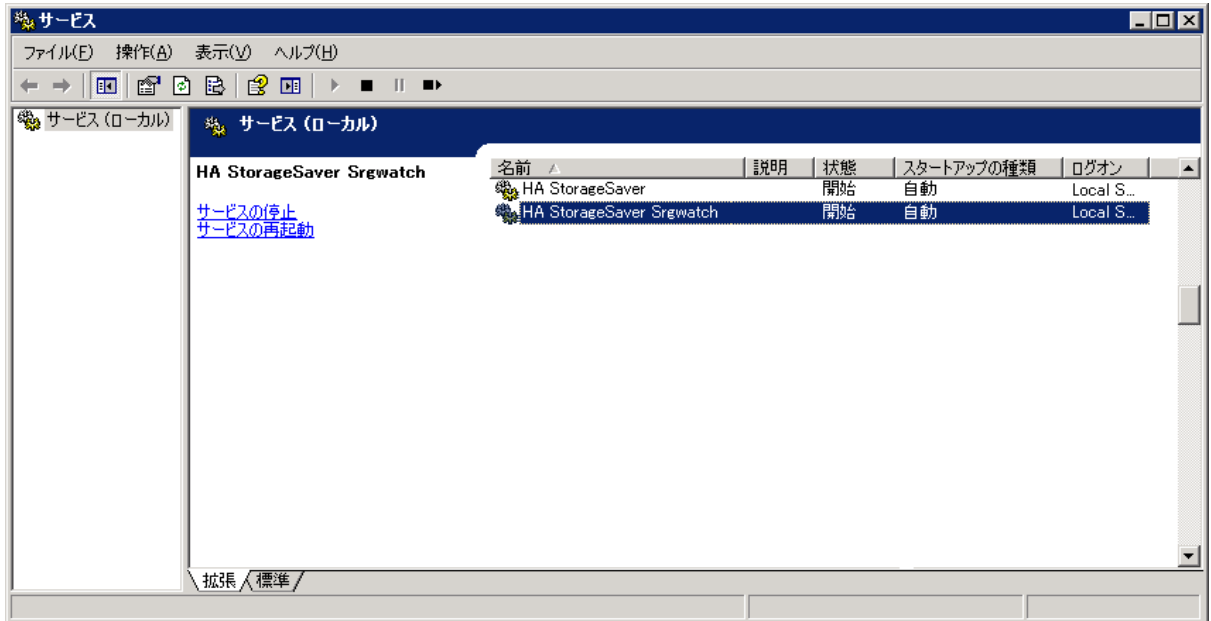


[HA StorageSaver] を右クリックし、メニューから [プロパティ] を選択し、下記画面を表示します。

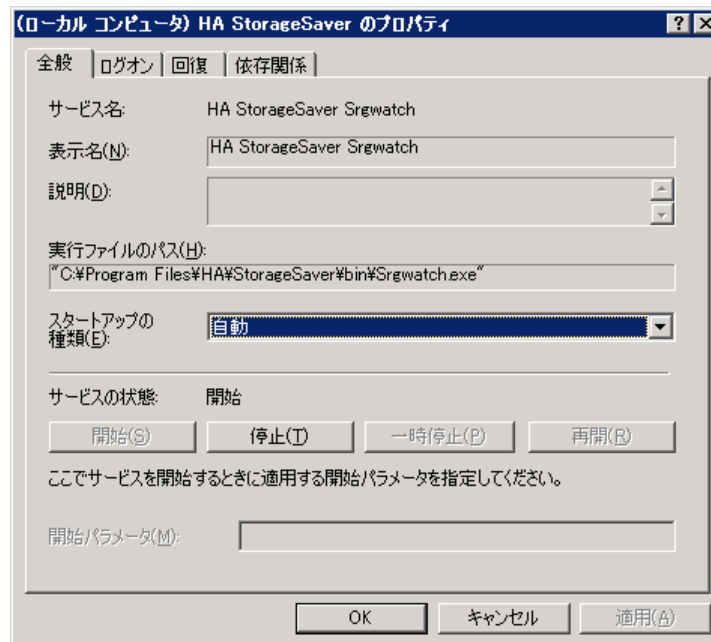


[全般] タブの [スタートアップの種類] を [手動] に変更します。

[HA StorageSaver Srgwatch] についても同様の設定を行います。



[HA StorageSaver Srgwatch] を右クリックし、メニューから [プロパティ] を選択し、下記画面を表示します。



[全般] タブの [スタートアップの種類] を [手動] に変更します。

-OS を再起動すると、サービスは起動されません。

-手動でサービスを開始すると、監視を開始します。

```
C:¥> net start "HA StorageSaver"
```

```
C:¥> net start "HA StorageSaver Srgwatch"
```

5.2. Oracle ASM 環境における運用管理コマンドの操作手順

- (1) リソース監視の状態を表示します。

Oracle ASM の構成は以下

- ASM ディスクグループ 1 つ
- 障害グループが 2 つ
- ASM ディスク 2 つ
- 標準冗長性

```

C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
-----
DATA1 : up      : pkg1
DISK  : up      : up      : extended
      :      3:0:1:4
DISK  : up      : up      : extended
      :      2:0:1:4
DISK  : up      : up      : extended
      :      3:0:1:5
DISK  : up      : up      : extended
      :      2:0:1:5
  
```

- ① DriveLetter の監視状態を表示します。

up

ASM ディスクグループは正常な状態です。

構成する ASM ディスクが正常に動作しています。

suspend

ASM ディスクグループで部分的な障害が発生しています。

構成する一部のディスクが障害状態にあり、残りのディスクによって運用されている状態です。

down

ASM ディスクグループで両系障害が発生しています。

構成するディスクが障害状態にあり、障害状態の障害グループ数が ASM ディスクグループの冗長性以上になっている状態です。

(2) ASM ディスクが異常になるとステータスがダウン状態になります。

```

C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
-----:-----:-----:-----
DATA1 : suspend   : pkg1
DISK  : down     : down   : extended
      :           : 3:0:1:4
DISK  : down     : down   : extended
      :           : 2:0:1:4
DISK  : up      : up     : extended
      :           : 3:0:1:5
DISK  : up      : up     : extended
      :           : 2:0:1:5
  
```

- ① TestI/O で ASM ディスクの I/O 障害を検出すると、物理ステータスが down になります。
- ② 障害発生から TimeLinkdown 秒後に、論理ステータスが down になります。
- ③ さらに、ASM ディスクの全てのパスで I/O 障害を検出している場合、DriveLetter の監視状態が suspend になります。

(3) 障害状態の障害グループ数が ASM ディスクグループの冗長性以上になると DriveLetter レベルのステータスもダウン状態になります。

```

C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
-----:-----:-----:-----
DATA1 : down     : pkg1
DISK  : down     : down   : extended
      :           : 3:0:1:4
DISK  : down     : down   : extended
      :           : 2:0:1:4
DISK  : down     : down   : extended
      :           : 3:0:1:5
DISK  : down     : down   : extended
      :           : 2:0:1:5
  
```

- ① TestI/O で ASM ディスクの I/O 障害を検出すると、物理ステータスが down になります。
- ② 障害発生から TimeLinkdown 秒後に、論理ステータスが down になります。
- ③ さらに、障害状態の障害グループ数が ASM ディスクグループの冗長性以上だった場合、DriveLetter の監視状態が Down になります。

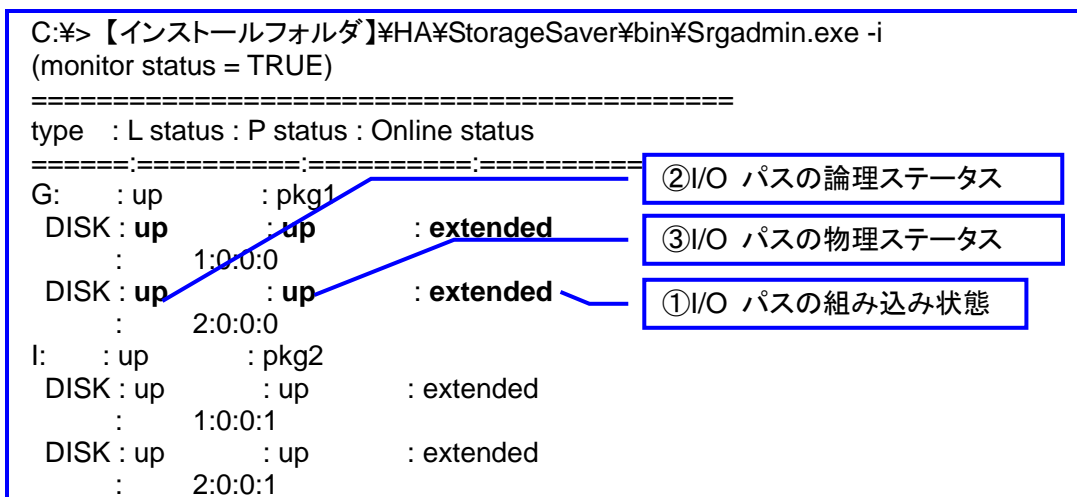
5.3. オンライン保守コマンドの操作手順

(1) Srgreduce コマンドは、指定された I/O パスの閉塞を実行します。

注意: I/O パスがマルチパス管理製品で冗長化されている場合のみ有効です。

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====
G:     : up       : pkg1
DISK : up       : up       : extended
      : 1:0:0:0
DISK : up       : up       : extended
      : 2:0:0:0
l:     : up       : pkg2
DISK : up       : up       : extended
      : 1:0:0:1
DISK : up       : up       : extended
      : 2:0:0:1
```



- ① 2 つ以上の FC(上記の場合は 1:, 2:)配下の I/O パスが共に組み込み済み(extended)であることが前提です。
- ②、③ 両 FC 配下の I/O パスが up であることを確認してください。

- 閉塞実行

①閉塞対象の I/O パス

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgreduce.exe 1:0:0:0
```

- ① 1:0:0:0 の I/O パスを閉塞します。

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====
G:     : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : reduced
      :           : 1:0:0:0
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 2:0:0:0
l:     : up       : pkg2
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 1:0:0:1
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 2:0:0:1
```

① I/O パスの組み込み状態

① I/O パスを閉塞すると Online status が reduced になります。

注意: I/O パス閉塞は、両系の FC カード配下の I/O パス
(冗長化されたすべての I/O パス)を同時に閉塞することはできません。
事前に、他系の FC カード配下の I/O パスが組み込まれていることを確認してください。

(2) Srgextend コマンドは、指定された I/O パスの復旧を実行します。

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====:=====:=====:=====
G:    : up       : pkg1
DISK : up       : up       : reduced
      :          : 1:0:0:0
DISK : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:0
l:    : up       : pkg2
DISK : up       : up       : extended
      :          : 1:0:0:1
DISK : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:1
```

① I/O パスの組み込み状態

① I/O パスが閉塞(reduced)されていることが前提です。

- 復旧実行

①復旧対象の I/O パス

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgextend.exe 1:0:0:0
```

① 1:0:0:0 の I/O パスを復旧します。

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====:=====:=====:=====
G:    : up       : pkg1
DISK : up       : up       : extended
      :          : 1:0:0:0
DISK : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:0
l:    : up       : pkg2
DISK : up       : up       : extended
      :          : 1:0:0:1
DISK : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:1
```

① I/O パスの組み込み状態

① I/O パスを復旧すると Online status が extended になります。

(3) Srgrecover コマンドは、すべての I/O パスの復旧を実行します。

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====
G:     : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : reduced
      :          : 1:0:0:0
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:0
l:     : up       : pkg2
DISK  : up       : up       : reduced
      :          : 1:0:0:1
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:1
```

① I/O パスの組み込み状態

① I/O パスが閉塞されています。

- 復旧実行

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgrecover.exe -v
パス: 1:0:0:0 result: OK
パス: 2:0:0:0 result: OK
パス: 1:0:0:1 result: OK
パス: 2:0:0:1 result: OK
srgrecover が完了しました。
```

① すべての I/O パスを一括で復旧します。

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monитор status = TRUE)
=====
type : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:   : up      : pkg1
DISK : up      : up      : extended
      :         : 1:0:0:0
DISK : up      : up      : extended
      :         : 2:0:0:0
I:   : up      : pkg2
DISK : up      : up      : extended
      :         : 1:0:0:1
DISK : up      : up      : extended
      :         : 2:0:0:1
```

① I/O パスの組み込み状態

① すべての I/O パスの Online status が extended になります。

5.4. 障害復旧時の操作

障害を検出し、該当障害箇所の復旧が完了すると、StorageSaver の監視ステータスを復旧する必要があります。

本復旧操作を実施しない状態で運用を継続すると、別の装置故障を契機に両系障害を誤検出する可能性がありますので必ず実施してください。

監視ステータスの復旧は Srgrecover コマンドを実行します。

※本手順の詳細については別冊の「CLUSTERPRO MC StorageSaver ハードウェア障害復旧後の運用手順」に詳述しておりますのでそちらもご参照ください。

(1) Srgrecover コマンドで、すべての I/O パスの復旧を実行します。

- 状態確認

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type  : L status : P status : Online status
=====
G:    : down      : pkg1
DISK : down      : down      : extended
      :          : 1:0:0:0
DISK : down      : down      : extended
      :          : 2:0:0:0
l:    : up        : pkg2
DISK : up        : up        : extended
      :          : 1:0:0:1
DISK : up        : up        : extended
      :          : 2:0:0:1
```

③DriveLetter のステータス

①I/O パスの論理ステータス

②I/O パスの物理ステータス

- 復旧実行

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgrecover.exe -v
パス: 1:0:0:0 result: OK
パス: 2:0:0:0 result: OK
パス: 1:0:0:1 result: OK
パス: 2:0:0:1 result: OK
srgrecover が完了しました。
```

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====
G:     : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 1:0:0:0
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:0
I:     : up       : pkg2
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 1:0:0:1
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:1
```

① すべての I/O パスの L status、P status が extended になります。

(2) 自動復旧機能について

ディスクアレイ装置の故障などにより障害が発生した場合、ハードウェアとして I/O パスを復旧させた後に、手動で Srgrecover コマンドを実行して StorageSaver の管理ステータスを復旧する必要があります。

自動復旧機能を使用すると、I/O パスの状態を定期的にチェックし、障害状態から復旧した I/O パスを検出すると、Srgrecover コマンドを実行して復旧した I/O パスを自動的に組み込みます。

ただし、一時的に I/O が通るような間欠故障が発生した場合に自動復旧機能を使用して I/O パスの自動組み込みを行うと、I/O の切り替えが頻発することによる I/O の遅延が発生する可能性があります。

そのため、障害が発生した場合には、確実に I/O パスの状態が復旧したことを確認した後に手動で Srgrecover コマンドを実行する運用を推奨します。

運用上オペレータの介入が困難であるなど、復旧作業を自動化せざるをえない場合は、システム定義ファイルの以下のパラメータを ENABLE に変更し、サービスを再起動することで、自動復旧機能を利用することができます。

- システム定義ファイル(【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.config)の変更

```
# Auto recovery flag
# used = ENABLE : unused = DISABLE(default)
AutoRecovery  ENABLE      ←ENABLE に変更します。
```

- サービスの再起動

システム定義ファイルの変更後、サービスを再起動します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -r
```

(3) オンライン保守中の自動復旧機能について

オンライン保守中は自動復旧機能を一時停止し、メンテナンス中の機器が自動で組み込まれることを防止します。

5.5. Oracle ASM 環境における障害発生時の復旧手順について

StorageSaver が監視している Oracle ASM 管理の I/O パスで障害を検知した場合は、以下の手順で Srgrecover コマンドを実行し、I/O パスの復旧を行ってください。

(1) 障害復旧

障害箇所の交換を行い、ハードウェアとして I/O パスの復旧をしてください。

(2) Oracle ASM の復旧

Oracle ASM において、障害を検知したディスクの削除・復旧等の作業を行い、Oracle ASM の状態を正常な状態にしてください。

(3) Srgrecover コマンドの実行

Srgrecover コマンドを実行し、監視対象の I/O パスの復旧をしてください。

※Oracle ASM の操作において、ディスクグループの構成変更が行われた場合には Srgquery コマンドを実行し、設定ファイルの自動生成の再作成をしてください。

- 状態確認

```
C:¥> 【インストールフォルダ】 ¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
DATA1 : down      : pkg1
DISK  : down      : down      : extended
      :      3:0:1:4
DISK  : down      : down      : extended
      :      2:0:1:4
DISK  : down      : down      : extended
      :      3:0:1:5
DISK  : down      : down      : extended
      :      2:0:1:5
```

- 復旧実行

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgrecover.exe -v
パス: 3:0:1:4 result: OK
パス: 2:0:1:4 result: OK
パス: 3:0:1:5 result: OK
パス: 2:0:1:5 result: OK
srgrecover が完了しました。
```

- 状態確認

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
DATA1 : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 3:0:1:4
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:1:4
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 3:0:1:5
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:1:5
```

① すべての I/O パスの L status、P status が extended になります。

(4) 自動復旧機能について

Oracle ASM の構成を監視する場合は自動復旧機能は無効にしてください。

5.6. H/W 構成変更時の設定手順

FC 接続構成や LUN 構成等、H/W 構成を変更する場合は、設定ファイルの再作成および適用操作を行う必要があります。

以下の手順を実行してください。

(1) サービスを手動起動に変更する

StorageSaver サービスを手動起動するように設定します。もともと手動起動である場合、この手順は不要です。

※「5.1. 運用管理コマンドの操作手順」の(7)を参照

(2) OS 停止

(3) H/W 構成変更

(4) OS 起動

(5) 設定ファイルの自動生成を実施する

設定ファイルは、Srgquery.exe により自動的に作成されます。

一般的に使用する引数は下記のとおりです。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgquery.exe -s <格納ディレクトリ>
```

PowerPath を導入した EMC ディスク装置を対象にした場合

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgquery.exe -p -s <格納ディレクトリ>
```

注意: 格納ディレクトリには、【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf を指定しないようにしてください。

(6) 設定ファイルの整合性をチェックする

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -c -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

(7) 設定ファイルを実行環境へ適用する

新たに作成された設定ファイルは、システム定義ファイル (srg.config) が全てデフォルト値で作成されています。以下コマンドを実行すると、リソース定義ファイル (srg.rsc) と、構成定義ファイル (srg.map) のみ適用され、システム定義ファイル (srg.config) は現行システムに適用しているファイルのまま使用できます。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -a -d -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

(8) サービスを自動起動に戻す

手順(1)にて手動起動に変更した場合、同じ手順で自動起動に戻します。変更していない場合、この手順は不要です。

5.7. Oracle ASM 構成変更時の設定手順

Oracle ASM の構成を変更する場合は、設定ファイルの再作成および適用操作を行う必要があります。以下の手順を実行してください。

(1) プロセス監視デーモンの停止

プロセス監視デーモンを停止します。すでに停止している場合、この手順は不要です。

```
C:¥> net stop "HA StorageSaver Srgwatch"
```

(2) StorageSaver 停止

```
C:¥> net stop "HA StorageSaver"
```

(3) Oracle ASM 構成変更

(4) 設定ファイルの自動生成を実施する

設定ファイルは、Srgquery.exe により自動的に作成されます。

一般的に使用する引数は下記のとおりです。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgquery.exe -o -s <格納ディレクトリ>
```

注意: 格納ディレクトリには、【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf を指定しないようにしてください。

(5) 設定ファイルの整合性をチェックする

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -c -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

(6) 設定ファイルを実行環境へ適用する

新たに作成された設定ファイルは、システム定義ファイル (srg.config) が全てデフォルト値で作成されています。以下コマンドを実行すると、リソース定義ファイル (srg.rsc) と、構成定義ファイル (srg.map) のみ適用され、システム定義ファイル (srg.config) は現行システムに適用しているファイルのまま使用できます。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -a -d -s  
<確認対象設定ファイルの格納ディレクトリ>
```

(7) StorageSaver 起動

```
C:¥> net start "HA StorageSaver"
```

(8) プロセス監視デーモンの起動

プロセス監視デーモンを起動します。もともと停止している場合、この手順は不要です。

```
C:¥> net start "HA StorageSaver Srgwatch"
```

6. CLUSTERPRO との連携

6.1. CLUSTERPRO との連携の概要

CLUSTERPRO と連携して、I/O パスの両系障害発生時に待機ノードへフェイルオーバーグループを切り替えて業務を継続することができます。

StorageSaver が CLUSTERPRO と連携する場合、次の方式で行います。

- ① CLUSTERPRO のモニタリソースにクラスタウェア連携デーモン(Srgstat)を登録する方式

また、障害時に確実にフェイルオーバーできるよう、フェイルオーバー時の CLUSTERPRO の動作設定は OS パニックを選択してください。

OS パニックを選択していない場合、I/O パス障害の影響でフェイルオーバー処理が正しく完了せず、フェイルオーバーに失敗したり、フェイルオーバー完了が遅延したりする場合があります。

連携方式の説明は「10.5 CLUSTERPRO との連携手順」を参照してください。

6.2. モニタリソースによる CLUSTERPRO との連携

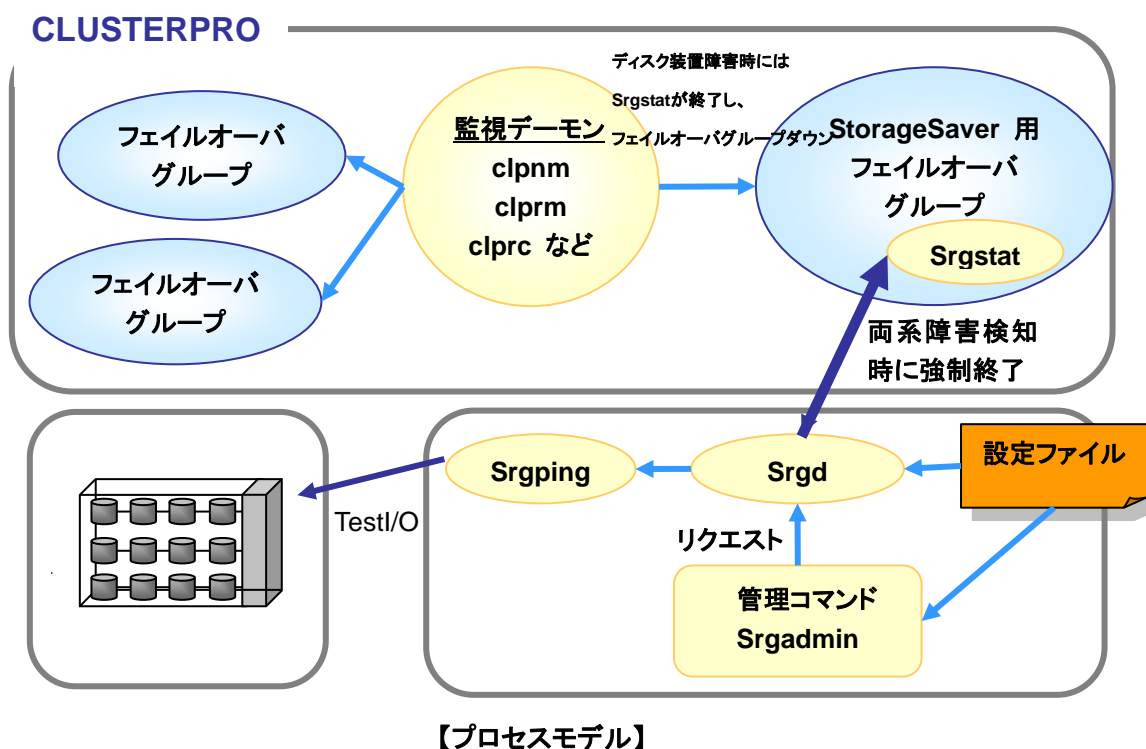
(1) CLUSTERPRO との連携について

クラスタウェア連携用コマンド Srgstat.exe を CLUSTERPRO のモニタリソースとして登録することで、ディスク装置の障害時のノードダウン、ノード切り替えを実現します。

本機能を利用する場合は、CLUSTERPRO にディスク装置監視用のフェイルオーバーグループを用意し、Srgstat.exe をモニタリソースに登録する必要がありますので、クラスタ設計時にフェイルオーバーグループの作成が必要です。

また、StorageSaver のコンフィグレーション(srg.config)の **DiskFaultAction**、**DiskStallAction** には **ServiceCmdEnable** を指定してください。

この方式であれば、複数ノードクラスタシステムでのノード切り替えだけでなく縮退した状態でのノードダウンや 1ノードのクラスタシステムでのノードダウンを実現できますので、非常に有用です。



(2) Srgstat の運用について

ディスク装置に障害が発生すると、Srgd.exe は I/O パスおよび DriveLetter レベルの管理ステータスを down 状態に変更し、イベントログにエラーメッセージを出力します。

このとき、StorageSaver のコンフィグレーション (srg.config) の **DiskFaultAction**、**DiskStallAction** に **ServiceCmdEnable** が設定されていると、Srgstat.exe が停止するので、CLUSTERPRO がモニタリソースで異常を検出しノード切り替え、ノードダウンが発生します。

Srgstat.exe は、Srgd.exe および Srgping.exe のプロセスが起動され、ディスク装置の監視を行っている場合に有効に機能します。

以下のようなリソース監視を停止している場合は、DriveLetter の障害を検出できません。

- Srgd(1M)および Srgping(1M)のプロセスが起動されていない。
- Srgadmin(1M)のオペレーション操作でリソース監視停止を指示されている。

<イベントログメッセージの出力例>

下記の順序でイベントログにメッセージが出力されます。

ディスク装置へのファイル I/O が停止すると、イベントログに記録されない場合もあります。

- 最初に、I/O パスの片系障害(正系 LUN 障害)を検出
パスが down になりました。(パス = 1:0:0:2)
- 次に、I/O パスの両系障害(副系 LUN 障害)を検出
ドライブレターが down になりました。(ドライブレター = F:)
- ドライブレターへのアクセス不可を検出し、Srgstat.exe が停止し、ノードダウン
ノード切り替えを実行
Srgstat.exe に TaskKill コマンドを実行しました。

(3) フェイルオーバーグループの構築手順について

Srgstat.exe を CLUSTERPRO のモニタリソースに登録する手順については、「10.5 CLUSTERPRO との連携手順」を参照してください。

7. イベントログメッセージ

7.1. イベントログに出力するメッセージについて

本製品では、リソース監視で致命的な異常を検出するとイベントログにメッセージを出力します。イベントログファイルおよびイベントログの種類は以下のとおりです。

イベントログファイル名	【SystemRoot】¥System32¥Winevt¥Logs¥Application.evtx
種類	エラー

7.2. 警報対象として登録することを推奨するメッセージ一覧

特に重要度の高いイベントログメッセージを記述します。
これらのメッセージが出力された場合は、HW 保守担当者に HW 検査を依頼してください。

- ◆ TestI/O のリソース監視で異常を検出した場合
エラーの出力契機は以下のとおりです。

パスが Down になりました。(パス = 'パス情報')

説明 : TestI/O で I/O パスの異常を検出

処置 : I/O パス異常を検出しましたので、早急に該当ディスクの点検を行ってください。

I/O リクエストが時間内に完了しませんでした。(DriveLetter = 'ドライブ名')

説明 : TestI/O で I/O ストールを検出

処置 : I/O パス異常を検出しましたので、早急に該当ディスクの点検を行ってください。

I/O リクエストが時間内に完了しませんでした。(Path = 'パス情報')

説明 : TestI/O で I/O ストールを検出

処置 : I/O パス異常を検出しましたので、早急に該当ディスクの点検を行ってください。

ドライブレターが Down になりました。(ドライブレター = 'ドライブ名')

説明 : TestI/O でドライブレターレベルの異常(down)を検出

処置 : ドライブレターのすべての I/O パスが障害となっています。
早急に該当ディスクの点検を行ってください。

Asm ディスクグループが Down になりました。

(Asm ディスクグループ = 'ASM ディスクグループ名')

説明 : TestI/O で ASM ディスクグループレベルの異常を(down)検出
本メッセージは Oracle ASM の構成を監視する場合にのみ出力されるメッセージです。

処置 : ASM ディスクグループを構成する一つあるいは複数の ASM ディスクが障害となっています。早急にディスクの点検を行ってください。

7.3. 運用管理製品との連携

本製品が出力するイベントログメッセージを、運用管理製品で監視することができます。これにより、イベントログに出力される重要なログをアラートとしてリアルタイムで通知でき、障害発生時も早急な発見、迅速な対応が可能になります。

本製品と連携可能な運用管理製品は、以下となります。

- ◆ WebSAM SystemManager
StorageSaver が異常を検知しイベントログにその内容が出力されると、WebSAM SystemManager のログ監視機能にて通知が行われます。
※連携手順については、「CLUSTERPRO MC (HA シリーズ) WebSAM SystemManager メッセージ監視連携手順書」を参照してください。

(2) 下記の制限事項があります。

- iStorage RV のデバイスの監視はできません。
- ソフトミラー構成では設定ファイル自動生成できません。
- 設定ファイル自動生成機能はすべてのデバイス構成をサポートするものではありません。
構成によっては自動生成できない場合がありますので、その場合はエディタなどで直接
ファイルを編集してください。

(3) 障害発生時の対応について

本製品では、リソース監視で異常を検出すると、イベントログに警告メッセージを出力します。このときの動作履歴やオンライン保守による閉塞／復旧の運用履歴をトレースファイルに取得していますので、障害解析資料として、以下の情報を保存してください。なお、トレースファイルは、サイクリックログとなっているためディスク容量を圧迫することはありません。

監視構成ファイル	【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf 配下の全ファイル
トレースファイル	【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥log 配下の全ファイル
イベントログファイル	【SystemRoot】¥System32¥Winevt¥Logs¥Application.evtx 【SystemRoot】¥System32¥Winevt¥Logs¥System.evtx
コマンド出力結果	diskpart コマンドの以下の出力結果 list disk list volume list partition (※1) spscmd -getlun -a (※2) または spsadmin /lun /a (※2) powermt display dev=all (※3) esxcli -s <ESXi ホストの IP アドレス> storage core path list (※4) esxcli -s <ESXi ホストの IP アドレス> storage vmfs extent list (※4) powershell gwmi -namespace "root¥wmi" MPIO_GET_DESCRIPTOR asmtool -list (※5,6) asmcmd lsdg (※5,6) asmcmd lsdk -k -G <ASM ディスクグループ名> (※5,6) (※1) 全てのディスクの結果を取得 (※2) SPS を使用している場合 (※3) PowerPath を使用している場合 (※4) vSphere ESXi 上の仮想 OS の場合 (※5) Oracle ASM の構成を監視している場合 (※6) コマンドを実行する場合は、 Oracle の Grid Infrastructure をインストールしたユーザで ログインしてください。
クラスタ関連ファイル	(※)クラスタ関連ファイルについては各クラスタウエア製品により異なりますので、製品ごとにマニュアルを参照してください。

8.2. オンライン保守における注意事項

(1)本製品のオンライン保守機能で I/O パスを閉塞しても、一時的に I/O が発行されることがありますのでご注意ください。

- オンライン保守中にフェイルオーバーグループが起動されると一時的に I/O が発生することがあります。
- I/O パスを閉塞しても FC アダプタを制御する FC ドライバから TestI/O のフレームが送出される場合があります。
- FC 上に DLT 装置が接続されている場合は、DLT 装置に対する I/O の停止、再開はできません。

(2)オンライン保守開始前に

- 特定の FC 配下 I/O パスへの TestI/O を停止する場合は、クラスタ配下の全ノードに対して FC 単位で閉塞コマンドを実行してください。

(3)オンライン保守終了後の取り扱いについて

- オンライン保守終了後は、Srgrecover.exe で構成復旧を実施してください。
- FC ケーブルを抜いたままでノードを立ち上げた場合、構成復旧コマンドを操作しても正常に動作しません。
OS が監視対象のディスク装置を正常に認識出来ていることを確認した上で、Srgrecover.exe で構成復旧を実施してください。

8.3. Oracle ASM 環境における注意制限事項

(1) 下記の注意事項があります

- 設定ファイルの自動生成を行う場合は、Oracle の Grid Infrastructure をインストールしたユーザでログインしてください。
- ログインユーザの環境変数に以下の 2 つが設定されていることを確認してください。
 - ・ORACLE_HOME
 - ・ORACLE_SID
- 設定ファイルの自動生成を行うサーバで ASM インスタンスが起動されている必要があります。
- Oracle ASM の状態として、mount 状態にある ASM ディスクグループのみ設定ファイル自動生成の対象となります。
- Oracle ASM においてファイル単位にミラーを変更している場合は、StorageSaver はデータの冗長性が失われていても異常と検出できません。
- StorageSaver では物理パスを監視するため、Oracle ASM が管理しているデータの論理的な障害は検知しません。
- StorageSaver では Oracle ASM が提供している機能であるリバランスによりデータの再配置が行われ、データの冗長性が回復しているかどうかの確認を行っていません。そのため、リバランスが行われ、データの冗長性が回復している場合でも、StorageSaver では異常を検出することがあります。

(2) 制限事項はありません

9. リファレンス

Srgd

名称

Srgd - StorageSaver リソース監視デーモン

構文

Srgd

機能説明

Srgd は、StorageSaver のリソース監視デーモンです。

Srgd は、クラスタウェアで構築されたシステムで使用される FC 接続および SCSI 接続のディスク装置の監視を行い、シングルノードまたはクラスタシステムの保全性を最大限に確保する機能を提供します。

Srgd は、Windows サービスとして起動されます。

GUI で Srgd を停止、再開させる場合、以下の操作を実行してください。

[スタート] メニュー - [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] を選択する。

停止時

サービスの一覧から [HA StorageSaver] を右クリックし、停止を選択する。

再開時

サービスの一覧から [HA StorageSaver] を右クリックし、開始を選択する。

また、コマンドプロンプトからの停止、再開も可能です。

コマンドプロンプトから Srgd を停止、再開させる場合、以下のコマンドを実行してください。

停止時

```
C:¥> net stop "HA StorageSaver"
```

再開時

```
C:¥> net start "HA StorageSaver"
```

ファイル

【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥*

【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥*

【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥log¥*

関連項目

Srgadmin, Srgconfig, Srgquery,
Srgextend, Srgreduce, Srgrecover

Srgadmin

名称

Srgadmin – 運用管理コマンド

構文

```
Srgadmin [-c status | start | stop | sync]
          [-i]
```

機能説明

Srgadmin は、StorageSaver を制御する運用管理コマンドです。

オプション

Srgadmin のオプションは以下のとおりです。

-c status	I/O パスの監視状態を表示します。
-c start	すべての I/O パスの監視を開始します。
-c stop	すべての I/O パスの監視を停止します。
-c sync	すべての I/O パスの Online Status (組み込み状態)の同期を取ります。
-i	I/O パス上の情報を詳細表示します。

注意事項

SPS 5.0 を使用する場合、コマンド実行に管理者権限が必要となります。
詳細については、「8.1 注意・制限事項」を参照してください。

実行例

・すべての I/O パスの状態を表示します。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -c status
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:     : up      : pkg1
DISK : up      : up      : extended
DISK : up      : up      : extended
```

- ・すべての I/O パスの状態を詳細表示します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:     : up      : pkg1
DISK  : up      : up      : extended
      :         : 1:0:0:1
DISK  : up      : up      : extended
      :         : 2:0:0:1
```

関連項目

Srgd

Srgwatch

名称

Srgwatch - プロセス監視デーモン

構文

Srgwatch

機能説明

Srgwatch は StorageSaver のサービスを監視します。

Srgwatch は StorageSaver のサービスの動作状態を監視しており、サービスの停止を検出すると、ただちに StorageSaver のサービスの再起動を行います。

Srgwatch は、Windows サービスとして起動されます。

GUI で Srgwatch を停止、再開させる場合、以下の操作を実行してください。

[スタート] メニュー - [コントロールパネル] - [管理ツール] - [サービス] を選択する。

停止時

サービスの一覧から [HA StorageSaver Srgwatch] を右クリックし、停止を選択する。

再開時

サービスの一覧から [HA StorageSaver Srgwatch] を右クリックし、開始を選択する。

また、コマンドプロンプトからの停止、再開も可能です。

コマンドプロンプトから Srgwatch を停止、再開させる場合、以下のコマンドを実行してください。

停止時

```
C:¥> net stop "HA StorageSaver Srgwatch"
```

再開時

```
C:¥> net start "HA StorageSaver Srgwatch"
```


リソースステータスについて

- ・ DISK リソースの Online status 欄には、I/O パスの組み込み管理状態が表示されます。

表示	意味
extended	組み込み状態
reduced	閉塞状態
alive	内部の監視状態の同期が一部取れていない
unknown	状態不明

- ・ DISK リソースの P status 欄には、TestI/O の状態が表示されます。

表示	意味
up	正常動作中
down	障害状態
----	監視していない

- ・ DISK リソースの Disk status 欄には、I/O パスの論理ステータスの状態が表示されます。

表示	意味
up	活性状態
down	非活性状態
----	監視していない

関連項目

Srgextend, Srgreduce, Srgrecover

Srgextend

名称

Srgextend - StorageSaver の監視リソースの復旧機能

構文

Srgextend I/Opath

機能説明

Srgextend は、指定された I/Opath に対応する I/O パスを復旧します。

オプション

Srgextend のオプションは以下のとおりです。

I/Opath	I/O パスを指定します。 指定された I/O パスが復旧の対象となります。 Srgdisplay.exe -v コマンドを実行して表示される H/W Path を指定してください。
---------	---

終了ステータス

成功すると 0 を返し、失敗するとそれ以外を返します。

注意事項

SPS 5.0 を使用する場合、コマンド実行に管理者権限が必要となります。
詳細については、「8.1 注意・制限事項」を参照してください。

実行例

・I/O パス(1:0:0:1)を復旧します。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgextend.exe 1:0:0:1
```

関連項目

Srgreduce, Srgrecover

Srgreduce

名称

Srgreduce - StorageSaver の監視リソースの閉塞機能

構文

Srgreduce I/Opath

機能説明

Srgreduce は、指定された I/Opath に対応する I/O パスを閉塞します。

オプション

Srgreduce のオプションは以下のとおりです。

I/Opath	I/O パスを指定します。 指定された I/O パスが閉塞の対象となります。 Srgdisplay.exe -v コマンドを実行して表示される H/W Path を 指定してください。
---------	---

終了ステータス

成功すると 0 を返し、失敗するとそれ以外を返します。

注意事項

SPS 5.0 を使用する場合、コマンド実行に管理者権限が必要となります。
詳細については、「8.1 注意・制限事項」を参照してください。

実行例

・I/O パス(1:0:0:1)を閉塞します。

```
C:> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgreduce.exe 1:0:0:1
```

関連項目

Srgextend, Srgrecover

Srgrecover

名称

Srgrecover - StorageSaver の監視リソースの構成復旧コマンド

構文

Srgrecover (オプション無し)
Srgrecover [-v] [-H FCname]

機能説明

Srgrecover は、指定された FC 名に対応する I/O パスを復旧します。
オプションを指定しない場合、すべての I/O パスを復旧します。

復旧されたことは Srgadmin コマンドの状態表示オプションで確認します。

オプション

Srgrecover のオプションは以下のとおりです。

- | | |
|-----------|--|
| -v | I/O パスの復旧結果を表示します。 |
| -H FCname | srg.rsc に記載している FC 名を指定します。
指定された FC 配下の全 I/O パスが対象となります。
Srgdisplay.exe コマンドを実行すると表示される name を
指定してください。 |

終了ステータス

成功すると 0 を返し、失敗するとそれ以外を返します。

注意事項

SPS 5.0 を使用する場合、コマンド実行に管理者権限が必要となります。
詳細については、「8.1 注意・制限事項」を参照してください。

実行例

- すべての I/O パスに対して構成復旧を実行します。

```
C:> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgrecover.exe -v
```

関連項目

Srgextend, Srgreduce

Srgconfig

名称

Srgconfig - StorageSaver の設定ファイルの確認、適用コマンド

構文

```
Srgconfig -c [-s 適用対象ディレクトリ]
Srgconfig -a [-d] [-s 適用対象ディレクトリ]
Srgconfig -r
```

機能説明

設定ファイルの妥当性を確認し、実行環境に適用します。

オプション

Srgconfig のオプションは以下のとおりです。

- c 指定されたディレクトリにある設定ファイルの妥当性、整合性をチェックします。
- a 指定されたディレクトリにある設定ファイルを Srg 実行環境に適用します。
この場合サービスの再起動契機で設定ファイルが有効となります。
また、新しく作成した設定ファイルを適用する前に現在の設定ファイルのバックアップを【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥backup 配下に作成します。
- d 指定されたディレクトリにある srg.rsc ファイルと srg.map ファイルのみを Srg 実行環境に適用します。
-a を指定した時のみ、指定することができます。
- r デーモンプロセスを再起動します。
- s 対象となる設定ファイルのディレクトリを指定します。

一番目の書式および二番目の書式では、-s オプションを省略した場合カレントディレクトリにある設定ファイルを対象に動作します。

終了ステータス

成功すると 0 を返し、失敗するとそれ以外を返します。

注意事項

特になし。

実行例

- ・D:¥tmp 配下に作成した設定ファイルの妥当性を確認する。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -c -s D:¥tmp
```

- ・D:¥tmp 配下に作成した設定ファイルを実行環境に適用する。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -a -s D:¥tmp
```

- ・D:¥tmp 配下に作成した構成ファイルのみを実行環境に適用する。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -a -d -s D:¥tmp
```

- ・サービスを再起動する。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -r
```

関連項目

Srgd, Srgquery

Srgquery

名称

Srgquery - StorageSaver の設定ファイルテンプレート自動生成コマンド

構文

```
Srgquery [ -s config file directory ]  
Srgquery -p [ -s config file directory ]  
Srgquery -M [ -s config file directory ]  
Srgquery -o [ -s config file directory ]
```

機能説明

StorageSaver の設定ファイルのテンプレートを自動生成します。

オプション

Srgquery のオプションは以下のとおりです。

- s 設定ファイルのテンプレートを作成するディレクトリを指定します。
 -s 指定のない場合は、カレントディレクトリにテンプレートを作成します。
 ※設定ファイル管理ディレクトリ以外を指定してください。
- p PowerPath を導入した EMC ディスク装置を監視対象にする場合指定します。
- o Oracle ASM の構成を監視対象に含めます。

終了ステータス

成功すると 0 を返し、失敗するとそれ以外を返します。

注意事項

SPS 5.0 を使用する場合、コマンド実行に管理者権限が必要となります。
詳細については、「8.1 注意・制限事項」を参照してください。

実行例

D:¥tmp 配下に、設定ファイルのテンプレートを作成する。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgquery.exe -s D:¥tmp
```

ファイル

srg.config	システム定義ファイル
srg.map	構成定義ファイル
srg.rsc	リソース定義ファイル

関連項目

Srgconfig, Srgd

Srgstat

名称

Srgstat - クラスタウェア連携用コマンド

構文

Srgstat [-h] [-P PkgName] [-V DriveLetterName] [-w WaitTime]

機能説明

StorageSaver がレポートするリソースステータスを監視します。

Srgstat のプロセス状態、あるいは終了ステータスを参照することで、StorageSaver がレポートするステータスを監視し続け、指定されたドライブレターが異常状態(down)になると異常終了します。

CLUSTERPRO と連携する場合のカスタムモニタリソースとして有効です。

StorageSaver のプロセスが動作していない場合、また Srgadmin でリソース監視の停止を指示された場合は、ドライブレターの異常を検出できないため、正常状態として報告します。

-w オプションを指定しない場合は、一回だけ StorageSaver がレポートするステータスを調べ終了します。

オプション

Srgstat のオプションは以下のとおりです。

- h コマンドの説明を表示します。
- P PkgName 監視したい PKG 名を指定します。
- V DriveLetterName 監視したいドライブレター名を指定します。
- w WaitTime ディスク監視を常駐させたい場合に指定します。
WaitTime には、監視間隔の時間(単位は秒)を指定します。

終了ステータス

-w オプションと StorageSaver がレポートするステータスによって、以下のように動作します。

-w オプション有りの場合:

StorageSaver が監視するディスクの状態	Srgstat コマンド	終了ステータス
ディスク正常時	終了せずに常駐	-
ディスク異常時	終了	1 を返す
StorageSaver が動作していない	終了せずに常駐	-

-w オプション無しの場合:

StorageSaver が監視するディスクの状態	Srgstat コマンド	終了ステータス
ディスク正常時	終了	0 を返す
ディスク異常時	終了	1 を返す
StorageSaver が動作していない	終了	2 を返す

注意事項

- 本コマンドはメモリ上に常駐します。swap 領域に退避されません。

実行例

pkg1 を監視対象とします。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgstat.exe -P pkg1
```

C: を監視対象とします。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgstat.exe -V C:
```

Srgstat を常駐させます。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgstat.exe -w 10
```

関連項目

Srgadmin, Srgd

10. 付録

10.1.運用管理コマンド

StorageSaver の運用管理コマンドの操作手順は下記のとおりです。

(1) サービス起動

コマンドラインからサービスを起動する場合は以下を実行します。

```
C:¥> net start "HA StorageSaver"
```

注意: 通常は OS 起動時に自動起動されます

起動状態を確認

```
C:¥> tasklist | findstr Srg
Srgd.exe           1668 Console           0      18,324 K
Srgping.exe        608 Console            0      16,228 K
```

(2) サービス終了

コマンドラインからサービスを終了する場合は以下を実行します。

```
C:¥> net stop "HA StorageSaver"
```

注意: 通常は OS 停止時に自動終了します

終了状態を確認

```
C:¥> tasklist | findstr Srg
```

前述の "Srgxxx" プロセスが表示されていないことを確認してください。

(3) 設定ファイル値の参照

システム定義ファイル 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.config

構成定義ファイル 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.map

リソース定義ファイル 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥conf¥srg.rsc

(4) 監視リソースの状態確認

- リソース一覧の表示

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -c status
```

- リソース詳細表示

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
```

(5) 監視リソースの一括復旧

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgrecover.exe -v
```

注意:自動閉塞などにより障害となった場合の復旧に使用します。

(6) オンライン保守

- 障害箇所の閉塞

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgreduce.exe <パス情報>
```

- 状態表示

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
```

注意:reduced になっていることを確認します。

- オンライン保守実施

この間、障害部位への TestI/O が停止

- 障害箇所の復旧

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgrecover.exe -v
```

注意:-v オプションは復旧結果を表示します。

- 状態表示

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
```

注意:extended になっていることを確認します。

10.2.Srgquery.exe による設定ファイル自動生成手順

以降はクラスタウェアとして CLUSTERPRO を例に説明します。

なお、下記の手順はクラスタ内のすべてのノードで実行してください。

(1) 設定ファイルの自動生成

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgquery.exe -s ./
```

CLUSTERPRO と連携を行う場合は、自動生成後に、srg.config の DiskFaultAction の値を SeviceCmdEnable に変更してください。

自動生成後、srg.config、srg.map、srg.rsc の内容を確認します。

(2) 設定ファイルの妥当性確認

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -c -s ./
```

(3) 設定ファイル適用

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -a -s ./
```

(4) サービス再起動

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgconfig.exe -r
C:¥> tasklist | findstr Srg
Srgd.exe           1668 Console           0      18,324 K
Srgping.exe        608 Console            0      16,228 K
```

(5) 監視リソースの状態が正常であることの確認

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====:=====:=====:=====
G:     : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 1:0:0:0
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 1:0:1:0
l:     : up       : pkg2
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 1:0:0:1
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 1:0:1:1
```

10.3.本製品のテスト手順について

(1)はじめに

StorageSaver を導入するシステムにおいて、設定ファイルの検証および性能チューニングの検証を擬似的に行う手順を説明します。

コマンドオペレーションでディスク障害を擬似的に発生することにより、物理ディスクの抜き差しなどの操作を行う必要がなくなり、システムへ影響を与えず評価が実現できます。

注意:本作業は必ずスーパーユーザーアカウント(Administrator 権限)で実施してください。

本作業は、ディスクアレイ装置が正しく構築されていることを確認した後に実施してください。

クラスタウェア連携を行う場合、クラスタウェアが正しく設定されていることを確認した後に実施してください。

● StorageSaver の擬似評価のパターン

擬似障害試験のパターンは以下のとおりです。

1. I/O パスの片系故障
2. I/O パスの両系故障

運用管理コマンドをデバッグモードで実行することで、TestI/O の実行結果を擬似的に異常に遷移させ、監視ステータスを up から down に変更します。

さらに両系の I/O パスを異常に変更することで DriveLetter ステータスを down 状態に擬似することができます。

● コマンド書式

擬似障害を発生させるためのコマンドラインは以下のとおりです。

```
Srgadmin -c debug -v [ on | off ] [ -P pathinfo | -F interfacename ]
```

on I/O ステータスを down にします。

off I/O ステータスを up にします。

また、以下のオプションがあります。

-P I/O パスごとに切り替えることができます。

-F FC 単位で切り替えることができます。指定できるのは FC のエイリアス名です。

(2) I/O パスの片系故障

マルチパス構成の I/O パスの片系障害を擬似的に発生させる手順を説明します。

1. 障害前に現在の状態をモニタリングします。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:     : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 1:0:0:0
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:0
l:     : up       : pkg2
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 1:0:0:1
DISK  : up       : up       : extended
      :          : 2:0:0:1
```

2. Srgadmin -c debug にて、片系のパスを指定します。
指定されたパスは強制的に I/O ステータスが up から down に変更され擬似的に片系障害を起こすことができます。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -c debug -v on -F fc2
Change debug value.
Path = 2:0:0:0
False -> True
Path = 2:0:0:1
False -> True
```

約 180 秒後

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
G:     : suspend      : pkg1
DISK : up           : up           : extended
      : 1:0:0:0
DISK : down         : down       : extended
      : 2:0:0:0
I:     : suspend      : pkg2
DISK : up           : up           : extended
      : 1:0:0:1
DISK : down         : down       : extended
      : 2:0:0:1
```

3. 片系障害を発生させた場合、イベントログにメッセージが出力されます。
以下のメッセージが出力されることを確認してください。
パスが Down になりました。(パス = 2:0:0:0)
パスが Down になりました。(パス = 2:0:0:1)

(3) I/O パスの両系故障

マルチパス構成の I/O パスの両系障害を擬似的に発生させる手順を説明します。
これによりクラスタウェアとのパッケージ連動の評価が可能になります。

1. 障害前に現在の状態をモニタリングします。既に片系の I/O パスが異常であることを確認します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i  
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
```

```
type : L status : P status : Online status
```

```
=====
```

```
G: : suspend : pkg1
```

```
DISK : up : up : extended
```

```
: : 1:0:0:0
```

```
DISK : down : down : extended
```

```
: : 2:0:0:0
```

```
I: : suspend : pkg2
```

```
DISK : up : up : extended
```

```
: : 1:0:0:1
```

```
DISK : down : down : extended
```

```
: : 2:0:0:1
```

2. 両系の I/O パスを異常状態にします。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -c debug -v on -F fc1
Change debug value.
Path = 1:0:0:0
False -> True
Path = 1:0:0:1
False -> True
```

約 180 秒後

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====
G:     : down      : pkg1
DISK   : down      : down      : extended
      :      1:0:0:0
DISK   : down      : down      : extended
      :      2:0:0:0
I:     : down      : pkg2
DISK   : down      : down      : extended
      :      1:0:0:1
DISK   : down      : down      : extended
      :      2:0:0:1
```

3. 両系障害を発生させた場合、イベントログにメッセージが出力されます。
以下のメッセージが出力されることを確認してください。
ドライブレターが Down になりました。(ドライブレター = xx)

両系のパスのステータスが down になったため、ドライブレターの状態も down となります。

注意: CLUSTERPRO の設定によってはサーバが shutdown または再起動するため、ステータスは確認することができない場合があります。
その場合は設定に従った動作が実行されることを確認してください

(4) テスト完了後の復旧

擬似障害テスト完了後の復旧手順を説明します。

1. マシンが shutdown した場合は、マシンを再起動して復旧させます。

Srgadmin.exe コマンドにてデバッグモードを off にした後、Srgrecover.exe -v を実行して構成を復旧させます。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -c debug -v off
Change debug value.
Path = 1:0:0:0
True -> False
Path = 2:0:0:0
True -> False
Path = 1:0:0:1
True -> False
Path = 2:0:0:1
True -> False
```

```
C:¥> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgrecover.exe -v
パス: 1:0:0:0 result: OK
パス: 2:0:0:0 result: OK
パス: 1:0:0:1 result: OK
パス: 2:0:0:1 result: OK
srgrecover が完了しました。
```

2. 復旧後、Srgadmin コマンドにて正常にディスク監視が行われていることを確認します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\HA\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i  
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
```

	type	: L status	: P status	: Online status
--	------	------------	------------	-----------------

```
=====
```

G:	: up		: pkg1	
DISK	: up		: up	: extended
	:	1:0:0:0		
DISK	: up		: up	: extended
	:	2:0:0:0		
l:	: up		: pkg2	
DISK	: up		: up	: extended
	:	1:0:0:1		
DISK	: up		: up	: extended
	:	2:0:0:1		

10.4.Oracle ASM 環境における擬似障害のテスト手順について

(1) はじめに

Oracle ASM の構成を監視する環境に StorageSaver を導入するシステムにおいて、設定ファイルの検証および性能チューニングの検証を擬似的に行う手順を説明します。

コマンドオペレーションでディスク障害を擬似的に発生することにより、物理ディスクの抜き差し等の操作を行う必要がなくなり、システムへ影響を与えず評価が実現できます。

注意: 本作業は必ずスーパーユーザーアカウント(Administrator 権限)で実施してください。

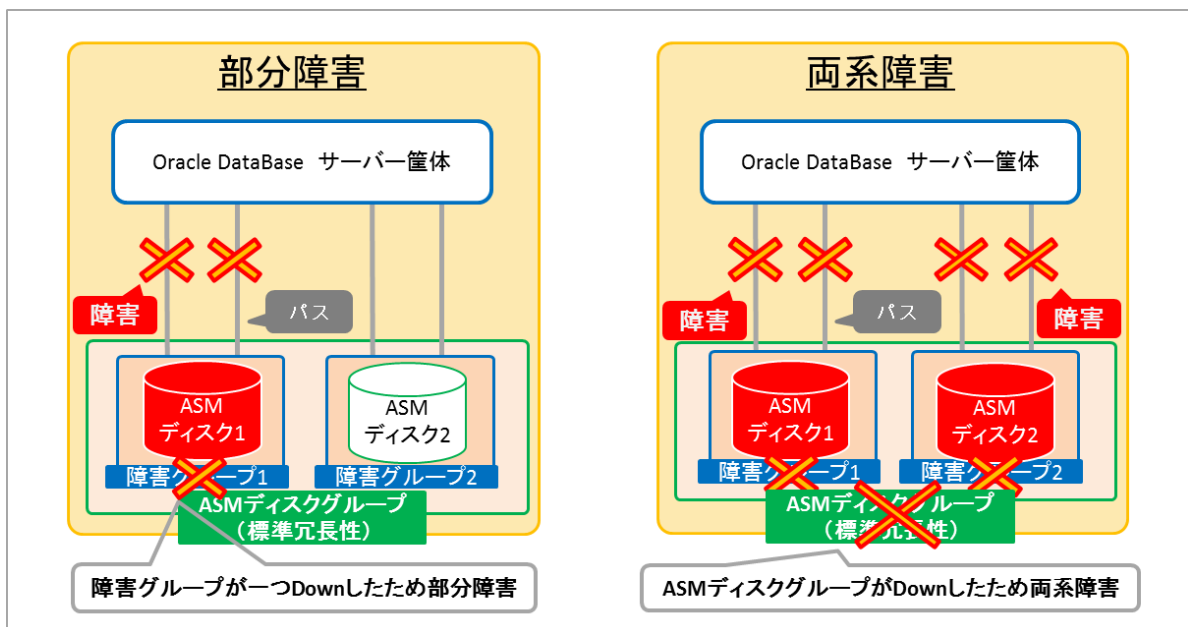
本作業は、ディスクアレイ装置が正しく構築されていることを確認した後に実施してください。

クラスタウェア連携を行う場合、クラスタウェアが正しく設定されていることを確認した後に実施してください。

● StorageSaver の擬似評価のパターン

擬似障害試験のパターンは以下の 2 通りです。

1. ASM ディスクグループの部分障害
2. ASM ディスクグループの両系障害



運用管理コマンドをデバッグモードで実行することで、TestI/O の実行結果を擬似的に異常に遷移させ、監視ステータスを up から down に変更します。

さらに両系の I/O パスを異常に変更することで DriveLetter ステータスを down 状態に擬似することができます。

(2) ASM ディスクグループの部分障害

部分障害を擬似的に発生させる手順を説明します。

1. 障害前に現在の状態をモニタリングします。

```
C:\> 【インストールフォルダ】 %HA%\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
DATA1 : up       : pkg1
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 3:0:1:4
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 2:0:1:4
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 3:0:1:5
DISK  : up       : up       : extended
      :           : 2:0:1:5
```

2. `srgadmin -c debug` にて、ディスクを指定します。
指定されたディスクは強制的に I/O ステータスが `up` から `down` に変更され擬似的に部分障害を起こすことができます。

```
C:\> 【インストールフォルダ】 %HA%\StorageSaver\bin\Srgadmin -c debug -v on -P 3:0:1:4
Change debug value.
Path = 3:0:1:4
False -> True
C:\> 【インストールフォルダ】 %HA%\StorageSaver\bin\Srgadmin -c debug -v on -P 2:0:1:4
Change debug value.
Path = 2:0:1:4
False -> True
```

約 180 秒後

```
C:\> 【インストールフォルダ】 %HA%\StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
DATA1 : suspend  : pkg1
DISK  : down     : down    : extended
      :      3:0:1:4
DISK  : down     : down    : extended
      :      2:0:1:4
DISK  : up       : up      : extended
      :      3:0:1:5
DISK  : up       : up      : extended
      :      2:0:1:5
```

3. 部分障害を発生させた場合、イベントログにメッセージが出力されます。
以下のメッセージが出力されることを確認してください。
パスが Down になりました。(パス = 3:0:1:4)
パスが Down になりました。(パス = 2:0:1:4)

(3) ASM ディスクグループの両系障害

両系障害を擬似的に発生させる手順を説明します。これによりクラスタウェア との
パッケージ連動の評価が可能になります。

1. 障害前に現在の状態をモニタリングします。既に部分的に I/O パスが異常であることを確認します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】 \StorageSaver\bin\Srgadmin.exe -i  
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
```

```
type   : L status : P status : Online status
```

```
=====
```

```
DATA1 : suspend  : pkg1
```

```
DISK  : down    : down    : extended  
      :      3:0:1:4
```

```
DISK  : down    : down    : extended  
      :      2:0:1:4
```

```
DISK  : up      : up      : extended  
      :      3:0:1:5
```

```
DISK  : up      : up      : extended  
      :      2:0:1:5
```


2. 両系の I/O パスを異常状態にします。

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin -c debug -v on -P 3:0:1:5
Change debug value.
Path = 3:0:1:5
False -> True
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin -c debug -v on -P 2:0:1:5
Change debug value.
Path = 2:0:1:5
False -> True
```

約 180 秒後

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type   : L status : P status : Online status
=====;=====;=====;=====
DATA1 : down      : pkg1
DISK  : down      : down      : extended
      :      3:0:1:4
DISK  : down      : down      : extended
      :      2:0:1:4
DISK  : down      : down      : extended
      :      3:0:1:5
DISK  : down      : down      : extended
      :      2:0:1:5
```

3. 両系障害を発生させた場合、イベントログにメッセージが出力されます。

以下のメッセージが出力されることを確認してください。

```
Asm ディスクグループが Down になりました。(Asm ディスクグループ = DATA1)
```

障害状態の障害グループ数が ASM ディスクグループの冗長性以上となったため、ASM ディスクグループの状態も down となります。

注意: CLUSTERPRO の設定によってはサーバが shutdown または再起動するため、ステータスは確認することができない場合があります。
その場合は設定に従った動作が実行されることを確認してください

(4) テスト完了後の復旧

擬似障害テスト完了後の復旧手順を説明します。

1. マシンが shutdown した場合は、マシンを再起動して復旧させます。

srgadmin コマンドにてデバッグモードを off にした後、srgrecover -v を実行して構成を復旧させます。

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin -c debug -v off -P 3:0:1:4
Change debug value.
Path = 3:0:1:4
True -> False
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin -c debug -v off -P 2:0:1:4
Change debug value.
Path = 2:0:1:4
True -> False
```

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin -c debug -v off -P 3:0:1:5
Change debug value.
Path = 3:0:1:5
True -> False
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin -c debug -v off -P 2:0:1:5
Change debug value.
Path = 2:0:1:5
True -> False
```

```
C:\> 【インストールフォルダ】¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgrecover.exe -v
パス: 3:0:1:4 result: OK
パス: 2:0:1:4 result: OK
パス: 3:0:1:5 result: OK
パス: 2:0:1:5 result: OK
srgrecover が完了しました。
```

2. 復旧後、srgadmin コマンドにて正常にディスク監視が行われていることを確認します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】 ¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i  
(monitor status = TRUE)
```

```
=====
```

	type	: L status	: P status	: Online status
--	------	------------	------------	-----------------

```
=====
```

DATA1	: up		: pkg1	
-------	------	--	--------	--

DISK	: up		: up	: extended
------	------	--	------	------------

	:	3:0:1:4		
--	---	---------	--	--

DISK	: up		: up	: extended
------	------	--	------	------------

	:	2:0:1:4		
--	---	---------	--	--

DISK	: up		: up	: extended
------	------	--	------	------------

	:	3:0:1:5		
--	---	---------	--	--

DISK	: up		: up	: extended
------	------	--	------	------------

	:	2:0:1:5		
--	---	---------	--	--

10.5.CLUSTERPRO との連携手順

10.5.1. CLUSTERPRO 連携設定

※CLUSTERPRO X 3.1 の場合の設定手順となります。

本製品は、モニタリソースによる CLUSTERPRO との連携を行うことが可能です。
本機能を利用する場合は、CLUSTERPRO にディスク装置監視用のフェイルオーバーグループを用意し、Srgstat.exe をモニタリソースとして登録する必要がありますので、クラスタ設計時にフェイルオーバーグループの作成が必要です。

本書では、フェイルオーバーグループを failover-01 として作成したものとしています。

本書では、CLUSTERPRO Server をインストールしたサーバの実 IP アドレスを[192.168.11.100]、ポート番号[29003(デフォルト値)]とした場合の例です。

接続例) <http://192.168.11.100:29003/>

また、『CLUSTERPRO WebManager』の設定を以下としています。

[グループリソースの定義]

プロパティ	設定値
タイプ(グループリソースのタイプ)	アプリケーションリソース
名前 (グループリソース名)	appli_srgstat

[モニタリソースの定義]

プロパティ	設定値
タイプ(モニタリソースのタイプ)	アプリケーション監視
名前 (モニタリソース名)	appliw_srg_mon
監視タイミング	活性時
対象リソース	appli_srgstat
回復動作	最終動作のみ実行
回復対象	LocalServer
最終動作	クラスタサービス停止と OS シャットダウン

事前に、現用系・待機系サーバで フェイルオーバーグループの全てのリソースが正常に起動していることを確認してください。

※本書で設定している各種プロパティの値は一例です。構築時にはそれぞれの環境に応じた値を設定してください。

1. 設定ファイルの確認

StorageSaver の設定を確認します。

- (1) StorageSaver のシステム定義ファイル(srg.config) にて**DiskFaultAction** および **DiskStallAction** が **ServiceCmdEnable** になっていることを確認します。

```
# disk fault action
# select ServiceCmdDisable(default), ServiceCmdEnable
DiskFaultAction ServiceCmdEnable

# Disk stall find action
# select ServiceCmdDisable(default), ServiceCmdEnable
DiskStallAction ServiceCmdEnable
```

DiskFaultAction、**DiskStallAction** に **ServiceCmdEnable** が設定されていない場合は設定変更してください。

設定ファイルを変更した後は必ず StorageSaver の再起動を行う必要があります。
「4.2 設定ファイルの自動生成手順 (3) 設定ファイルの確認、適用手順」を参照し、StorageSaver を再起動してください。

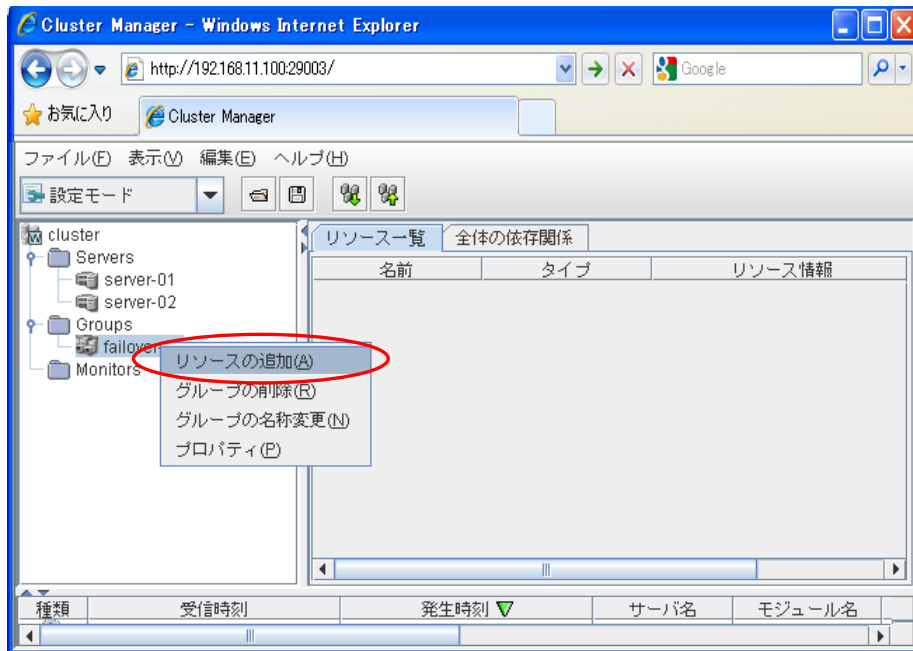
2. アプリケーションリソースの作成

Srgstat.exe を起動させるリソースを作成します。

以下の作業は、『CLUSTERPRO WebManager』にて実施します。

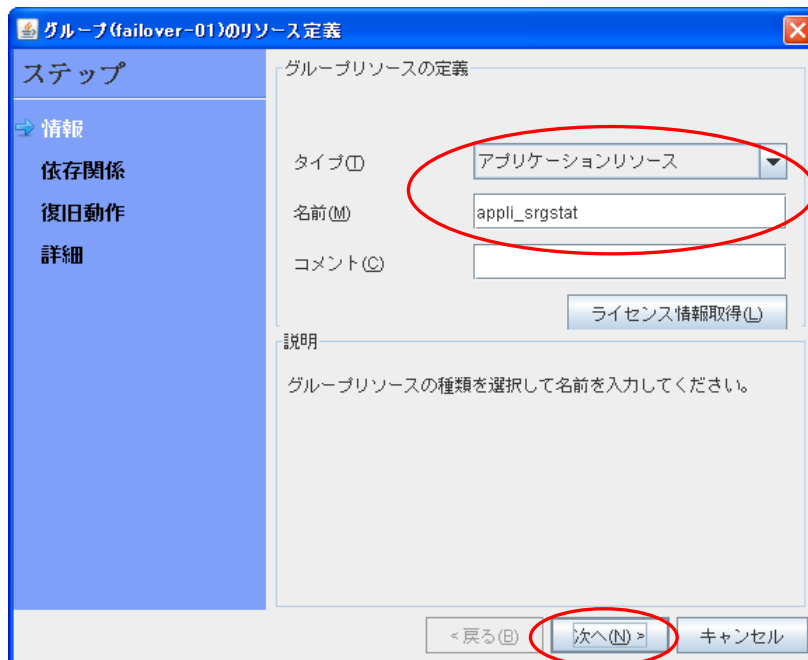
『WebManager』の [表示] メニューから [設定モード] を選択するか、ツールバーのドロップダウンメニューで [設定モード] を選択します。

(1) フェイルオーバーグループ [failover-01] を右クリックし [リソースの追加] を選択します。

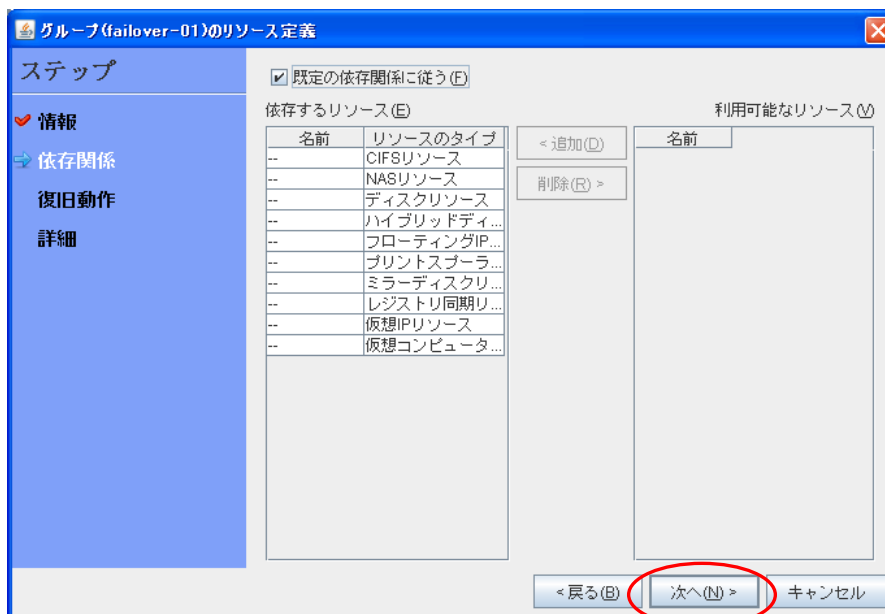


(2) 『グループのリソース定義』ダイアログボックスが表示されます。

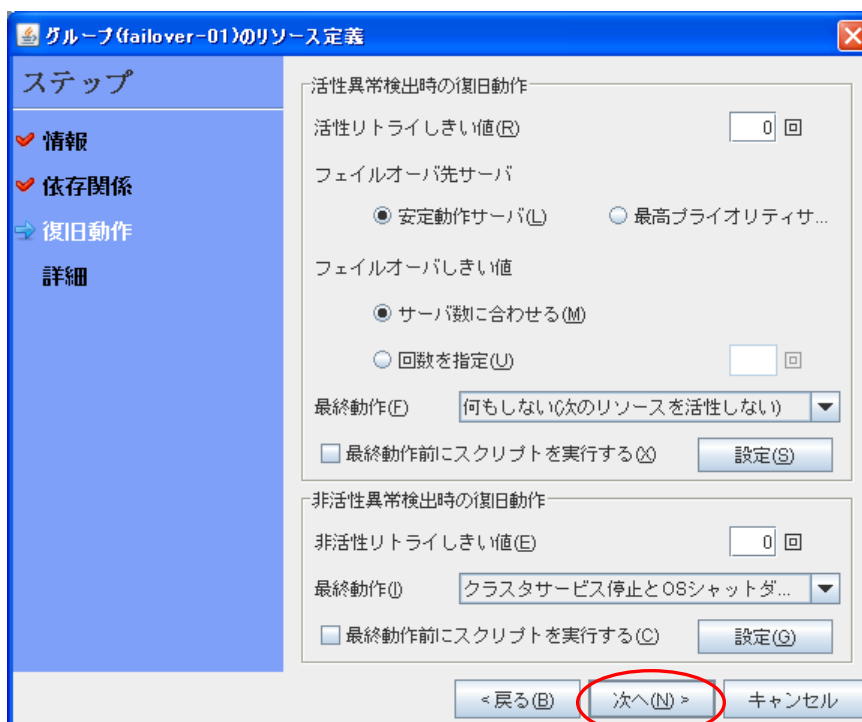
[タイプ] にて [アプリケーションリソース] を選択し、[名前] にグループリソース名 “appli_srgstat” を入力し、**次へ(N)**を押してください。



- (3) 依存関係設定のページが表示されます。
 本書ではデフォルトのまま変更しません。次へ(N)を押してください。



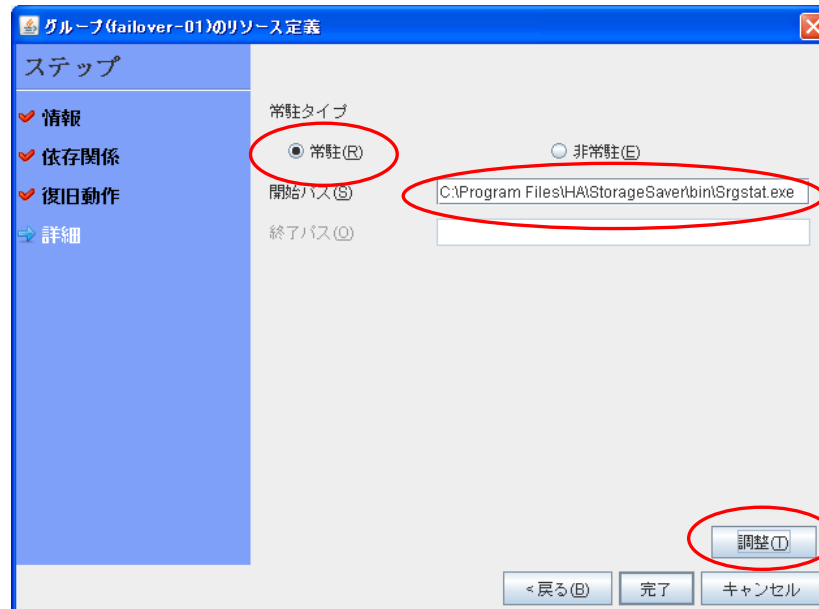
- (4) [活性異常検出時の復旧動作]、[非活性異常検出時の復旧動作] の設定画面が表示されます。
 本書ではデフォルトのまま変更しません。次へ(N)を押してください。



(5) 詳細設定のページが表示されます。

[常駐タイプ] が **常駐** になっていることを確認してください。

[開始パス] に “C:\Program Files\HA\StorageSaver\bin\Srgstat.exe”を入力し、**調整(T)**を押してください。



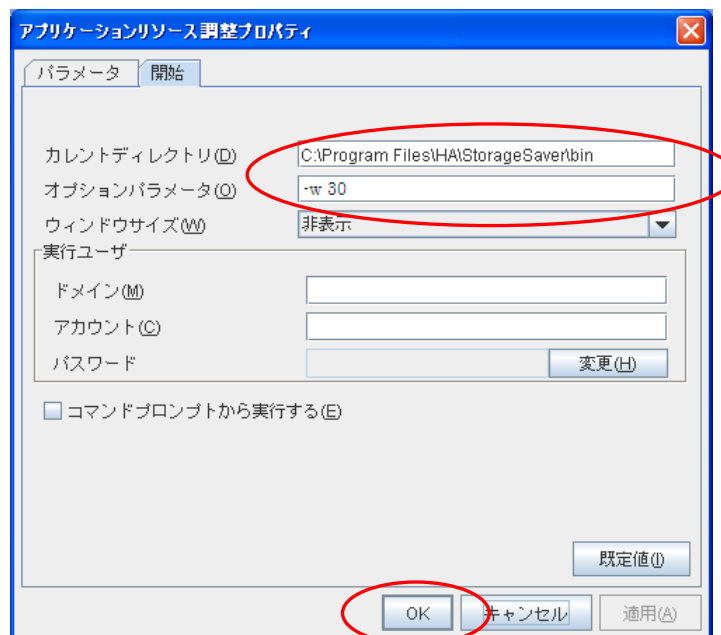
※本書では、StorageSaver のインストール先を(C:\Program Files)として記述します。
インストールパスにあわせて変更してください。

(6) 『アプリケーションリソース調整プロパティ』が表示されます。

[開始] タブを選択し、下記に記述しているパラメータを入力し、**OK** を押してください。

カレントディレクトリ: C:\Program Files\HA\StrageSaver\bin

オプションパラメータ: -w 30



本書では、その他の項目はデフォルトのまま変更しません。
『グループのリソース定義』の **完了** を押してください。

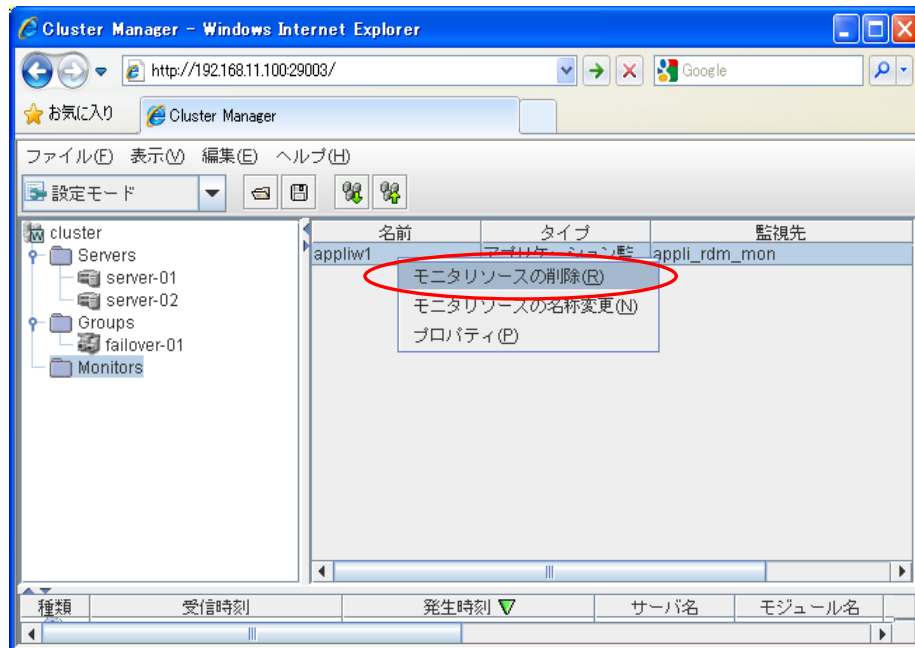
3. モニタリソースの作成

Srgstat.exe を監視するモニタリソースを作成します。

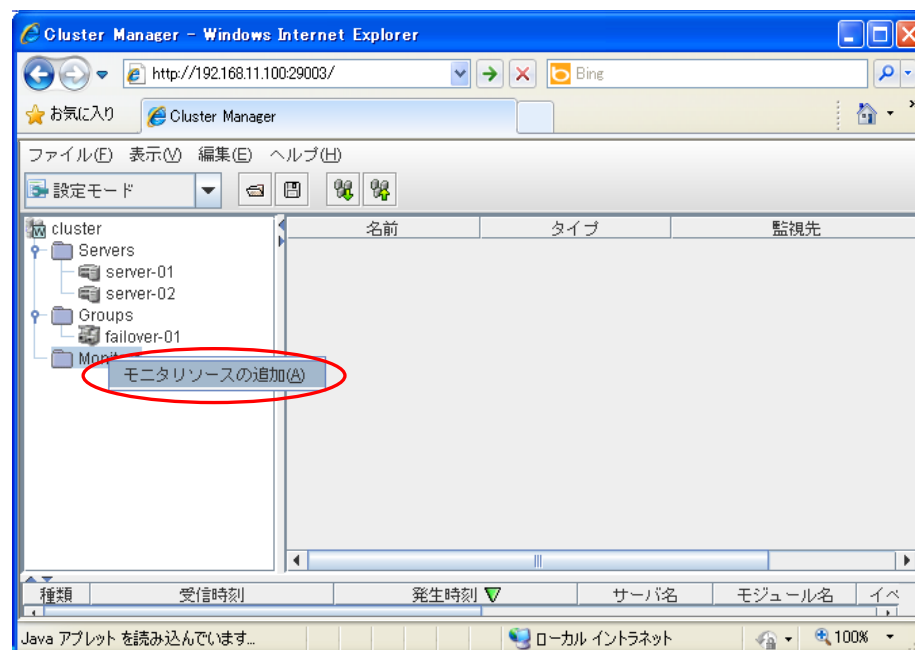
- (1) 「1 アプリケーションリソースの作成」でリソース作成後、モニタリソース(appliw1)が自動作成されます。

本書では、[モニタリソースの追加] より作成しますので、モニタリソース(appliw1)は削除します。

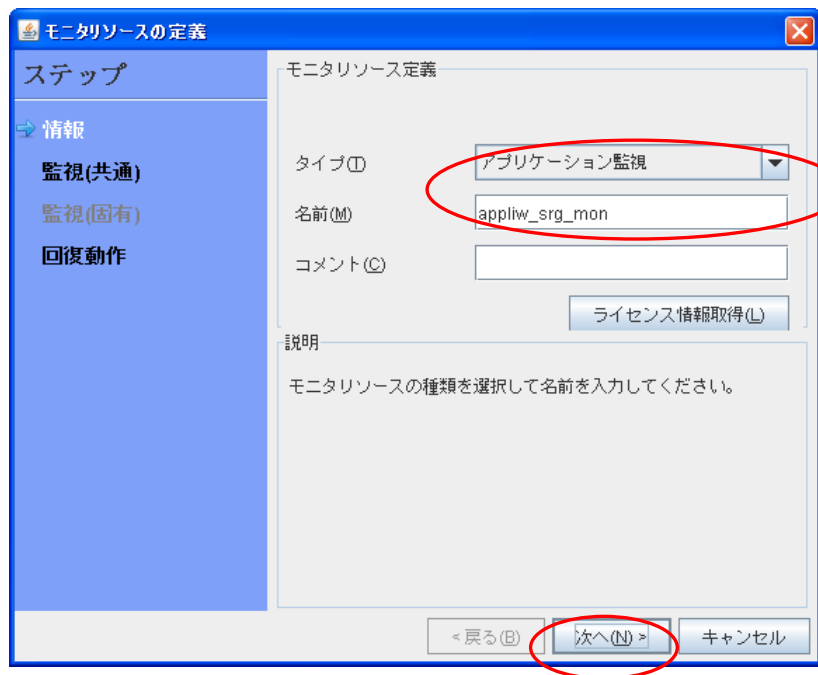
モニタリソース [appliw1] を右クリックし [モニタリソースの削除] を選択し削除します。



- (2) [Monitors] を右クリックし、[モニタリソースの追加] を選択します。

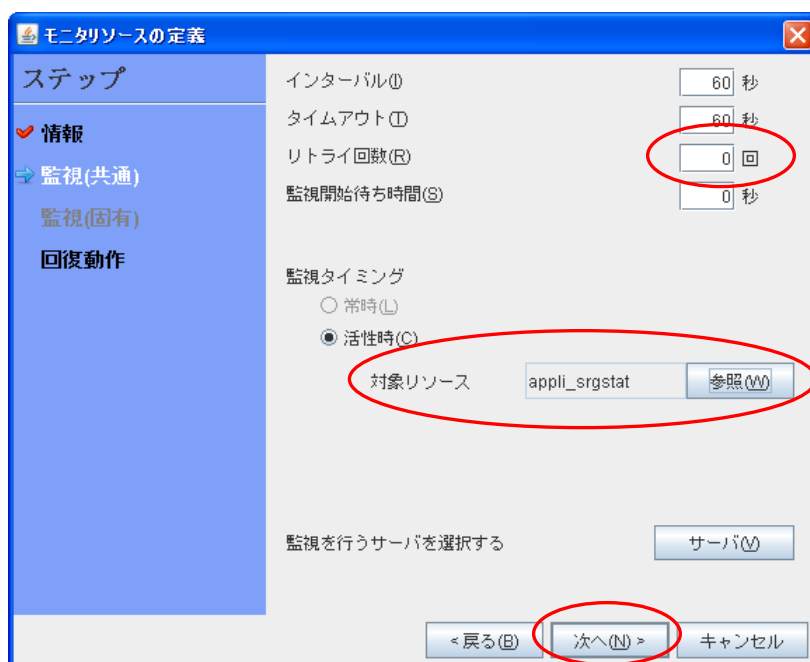


- (3) 『モニタリソースの定義』ダイアログボックスが開きます。
[タイプ] で [アプリケーション監視] を選択し、[名前] にモニタリソース名 "appliw_srg_mon" を入力します。次へ(N)を押してください。



- (4) 監視条件を設定します。
- ① [リトライ回数] を "0" 回に変更してください。
 - ② [対象リソース]の 参照(W) を押し、表示されるツリービューで[appli_srgstat] アプリケーションリソースを選択して OK を押してください。
[対象リソース] に [appli_srgstat] アプリケーションリソースが追加されたことを確認してください。

本書では、その他の項目はデフォルトのまま変更しません。次へ(N)を押してください。



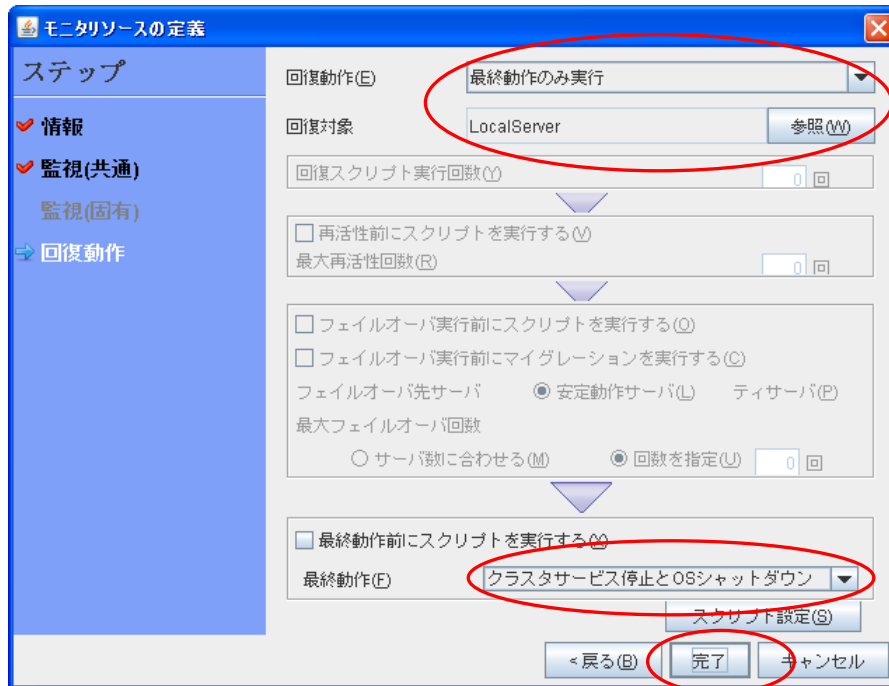
(5) 回復動作を設定します。

[回復動作] に [最終動作のみ実行] を選択します。

[回復対象] の **参照(W)** を押し、表示されるツリービューで [LocalServer] を選択して **OK** を押します。[回復対象] に [LocalServer] が追加されたことを確認します。

[最終動作] に [クラスタサービス停止と OS シャットダウン] を選択します。

設定完了後、**完了** を押してください。



4. クラスタ構成情報のアップロード

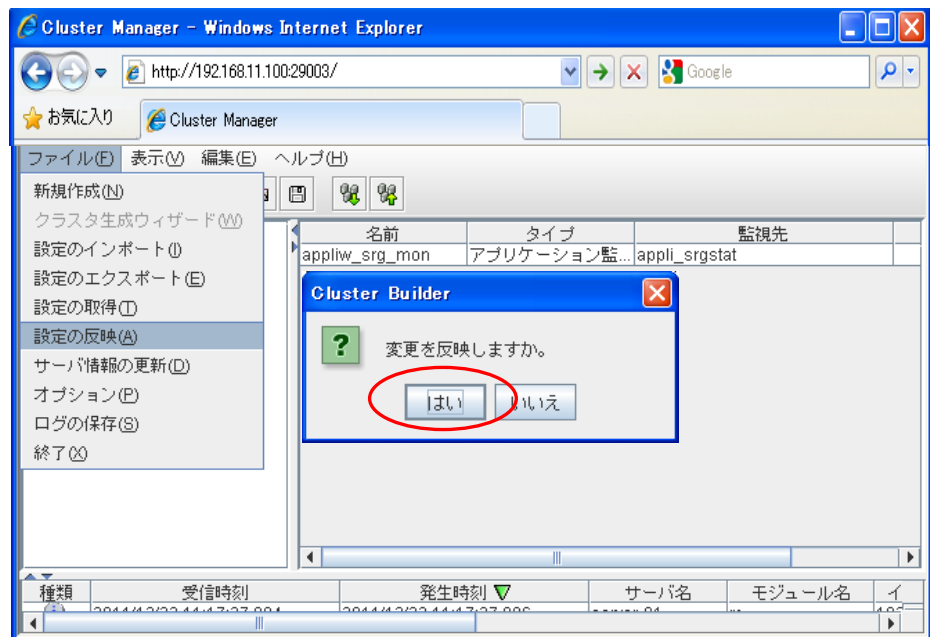
(1) クラスタ構成情報の内容を、CLUSTERPRO 本体の環境に反映します。

[ファイル] メニューから [設定の反映] を選択します。

〈変更を反映しますか。〉というポップアップメッセージが表示されますので、**はい**を押します。

アップロードに成功すると、〈反映に成功しました。〉のメッセージが表示されますので、了解 を押してください。

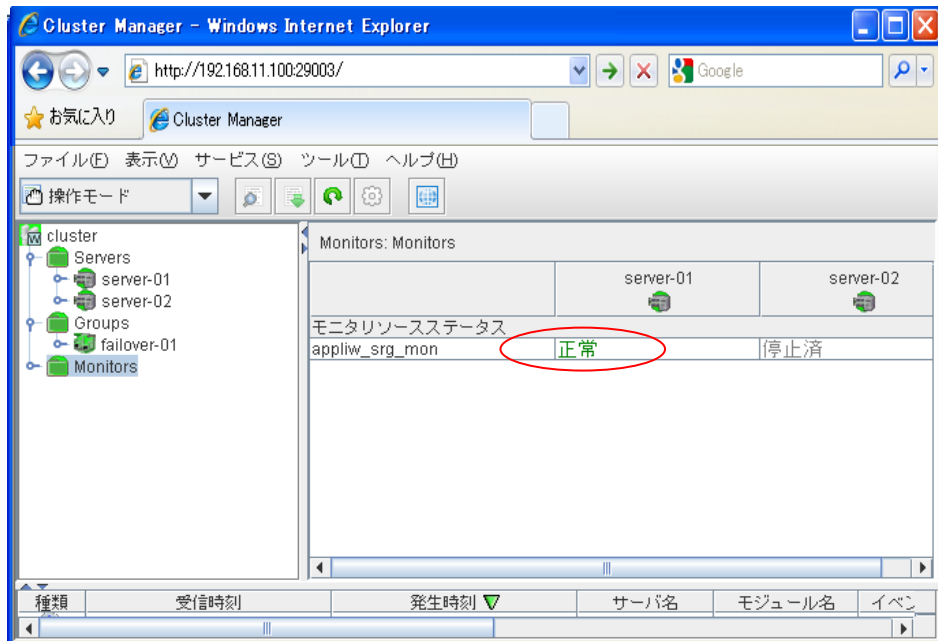
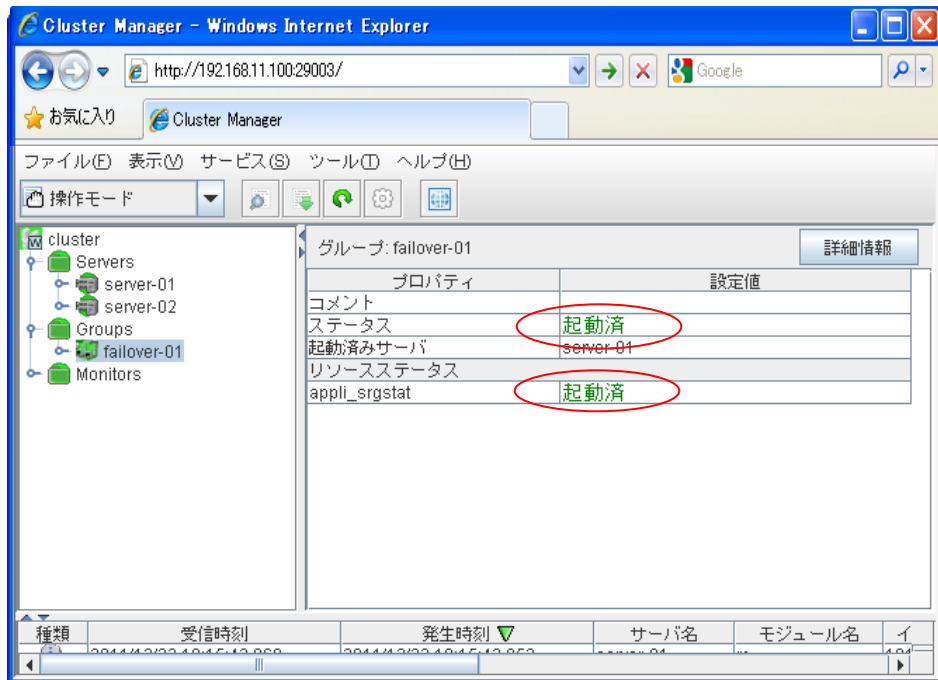
アップロードに失敗した場合は、表示されるメッセージにしたがって操作を行ってください。



クラスタサスペンド状態、またはクラスタを停止している場合は、クラスタリジュームもしくは、クラスタを開始してください。

(2) 『WebManager』の [表示] メニューより [操作モード] を選択し、以下の項目を確認してください。

- ・ 現用系サーバにて Srgstat.exe 起動リソース [appli_srgstat] が [起動済] である事を確認してください。
- ・ 現用系サーバにて Srgstat.exe 監視用のモニタリソース [appliw_srg_mon] のステータスが [正常]である事を確認してください。



以上で、CLUSTERPRO の設定は終了です。

10.5.2. 動作確認

以降の手順で StorageSaver および CLUSTERPRO の設定の動作確認を行います。
FC 抜線により障害を発生させ、ディスクにアクセスができなくなった際にフェイルオーバーが発生することを確認します。
また、コマンドオペレーションでディスク障害を擬似的に発生させることも可能です。
擬似障害テスト手順については、「10.3 本製品のテスト手順について」の章を参照してください。

1. 現用系サーバでの StorageSaver 動作確認

FC ケーブルが 2 本接続されている環境における動作確認手順を記載します。

(1) 片方の FC ケーブルを抜線し、片系障害を発生させます。

(2) 約 180 秒後に片系障害を検出することを確認します。

```
C:\> 【インストールフォルダ】\¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i
(monitor status = TRUE)
=====
type : L status : P status : Online status
=====:=====:=====:=====
G:   : suspend  : pkg1
    DISK: up      : up      : extended
        :   1:0:0:0
    DISK: down   : down   : extended
        :   2:0:0:0
l:   : suspend  : pkg2
    DISK: up      : up      : extended
        :   1:0:0:1
    DISK: down   : down   : extended
        :   2:0:0:1
```

(3) 片系障害を発生させた場合、イベントログにメッセージが出力されます。

以下のメッセージが出力されることを確認してください。

パスが Down になりました。(パス = 2:0:0:0)

パスが Down になりました。(パス = 2:0:0:1)

(4) 続いて、もう片方の FC ケーブルを抜線して両系障害を発生させます。

(5) 約 60 秒後に障害を検出し、StorageSaver のステータスが down になることを確認します。

```
C:¥> 【インストールフォルダ】 ¥HA¥StorageSaver¥bin¥Srgadmin.exe -i  
(monitor status = TRUE)
```

```
=====  
type : L status : P status : Online status
```

```
=====:=====:=====:=====  
G:   : down      : pkg1  
    DISK: down    : down      : extended  
      :      1:0:0:0  
    DISK: down    : down      : extended  
      :      2:0:0:0  
l:   : down      : pkg2  
    DISK: down    : down      : extended  
      :      1:0:0:1  
    DISK: down    : down      : extended  
      :      2:0:0:1
```

(6) 両系障害を発生させた場合、イベントログにメッセージが出力されます。

以下のメッセージが出力されることを確認してください。

ドライブレターが Down になりました。(ドライブレター = xx)

両系のパスのステータスが down になったため、ドライブレターの状態も down となります。

2. 待機系サーバへのフェイルオーバー確認

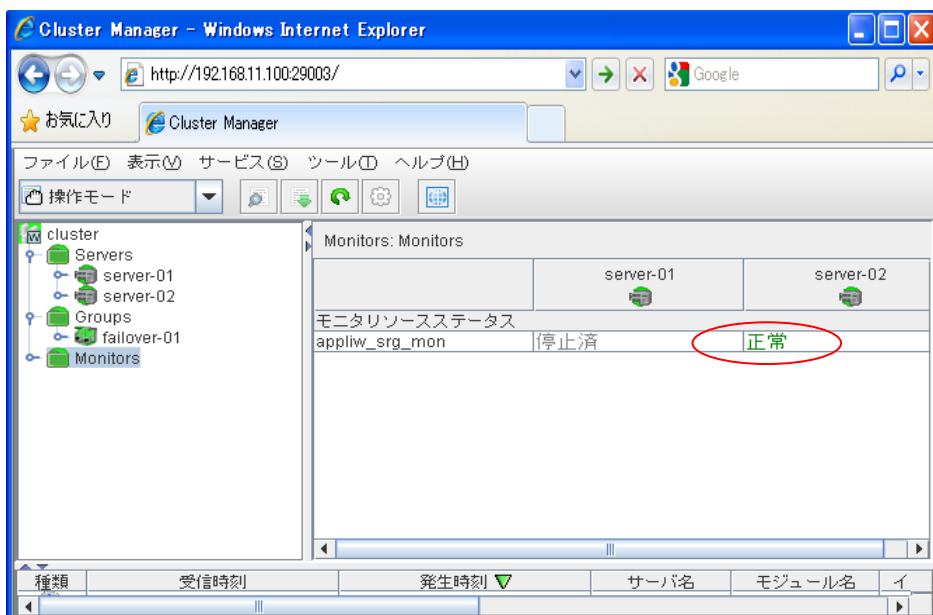
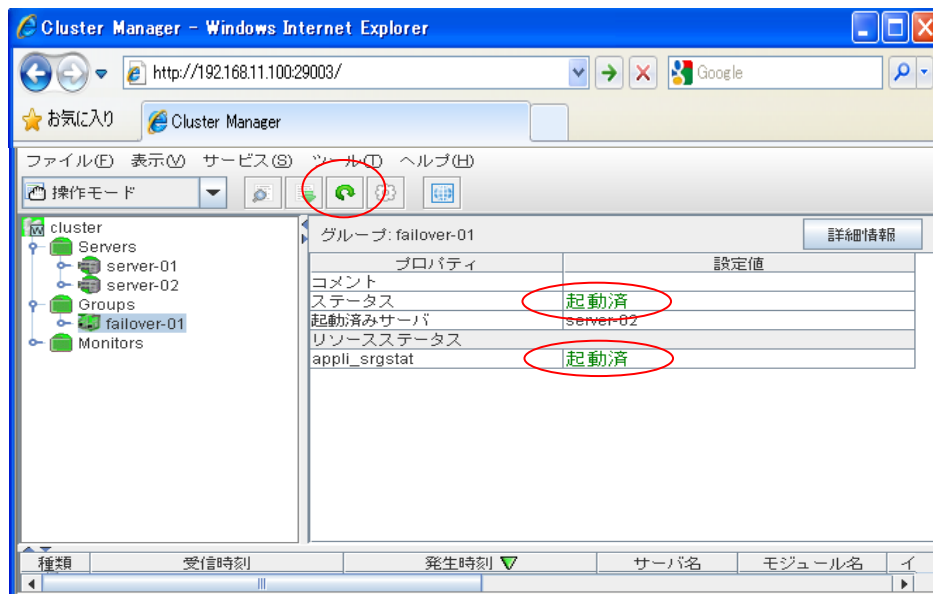
前述の手順によりフェイルオーバーとなり、[最終動作] に設定した [クラスタサービス停止と OS シャットダウン] が実行されますので、サーバを起動してください。

- (1) 『CLUSTERPRO WebManager』のアラートログで以下のメッセージが出力されていることを確認します。

メッセージ
監視 appliw_srg_mon が異常を検出したため、システムのシャットダウンが要求されました。 internal よりシステムのシャットダウンが要求されました。

- (2) 『CLUSTERPRO WebManager』の [リロード] を選択し、以下の項目を確認してください。

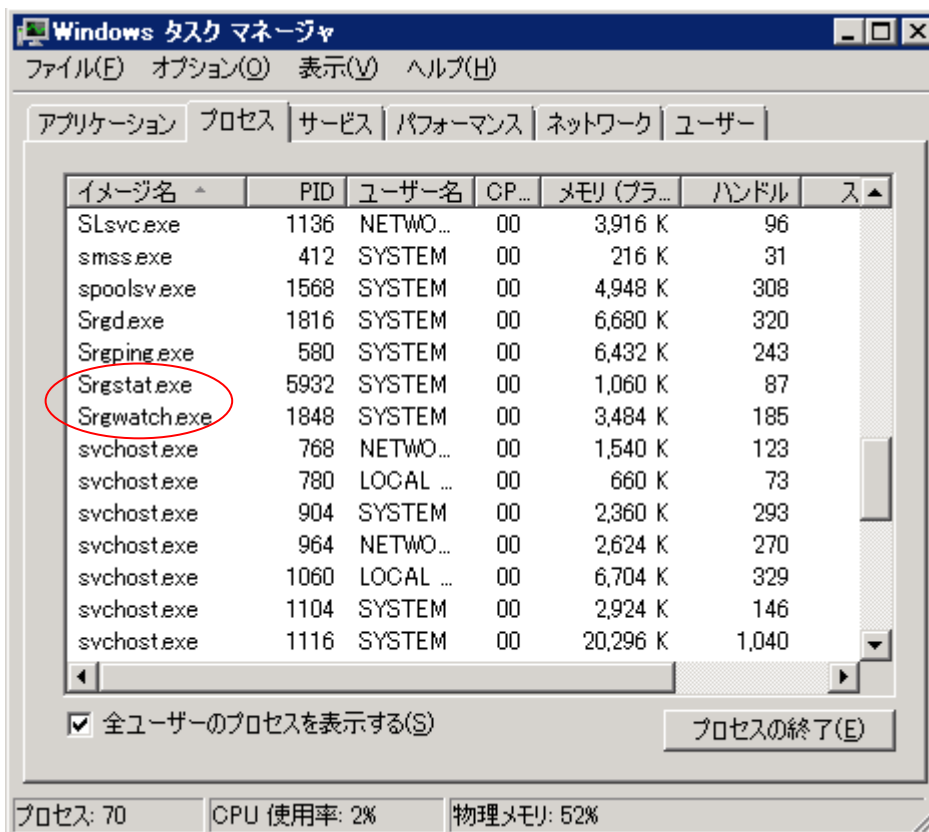
- ・待機系サーバにて全てのフェイルオーバーグループが [起動済] であることを確認してください。
- ・Srgstat.exe 監視用のモニタリソース [appliw_srg_mon] のステータスが待機系にて [正常] であることを確認してください。



3. 待機系サーバでの StorageSaver の確認

待機系サーバで、Srgstat.exe が起動していることを確認してください。

[タスクバー] を右クリックして表示されるメニューから [タスクマネージャ] を選択します。
[プロセス] タブで、Srgstat.exe が起動していることを確認します、



以上で動作確認完了となります。

CLUSTERPRO
MC StorageSaver 2.1 for Windows
ユーザーズガイド

2016年3月 第2版
日本電気株式会社
東京都港区芝五丁目7番1号
TEL (03) 3454-1111 (代表)



© NEC Corporation 2016

日本電気株式会社の許可なく複製、改変などを行うことはできません。
本書の内容に関しては将来予告なしに変更することがあります。

保護用紙